

中国における学校健康教育に関する教育課程の変遷

黄 思華¹⁾ 小浜 明²⁾ 宮本 友弘³⁾

キーワード：中国、学校健康教育、教育課程

1. はじめに

中華人民共和国（以下、中国と記す）では、学校教育の一環として行われる健康に関する教育は、学校衛生教育あるいは学校健康教育と呼ばれる。歴史的には、学校衛生教育が長らく使用されてきたが、1984年以降は学校健康教育に変わりつつある。

中国の『教育大辞典』（1998）によれば^{注1}、学校衛生教育とは、「児童生徒に衛生に関する科学的な基礎知識を伝授し、衛生行動・習慣を形成する教育である。学校衛生教育は公衆衛生教育の基礎であり、学校教育の一部分である。主に人体解剖生理、個人と環境衛生、思春期と性の衛生、精神衛生、栄養衛生、疾病予防、不慮の事故の予防と救急法などの衛生に関する知識と技能の伝授、衛生習慣の形成を目的とする」¹⁾と定義されている。

また、同辞典の健康教育という項目においては、「広義の健康教育は社会の中で、衛生に関する知識を普及させ、全国民の衛生・健康水準を高める教育である。狭義の健康教育は特に学校で生理、精神、思春期などの知識を学習し、衛生習慣を形成し、健康水準を高める教育を指す。内容は栄養、衛生、身体鍛錬、喫煙、麻薬、心の健康、性教育などである」²⁾と記述されている。この記述における狭義の健康教育が、学校健康教育と考えられる。

さらに、『学校健康教育』（2004）によれば、学校健康教育とは、「公衆衛生教育の重要な構成部分であり、社会的背景を踏まえ、学校で生徒の健康を全面的に増進することを目的とし、計画性をもち、組織的、系統的な教育活動である」³⁾と定義されている。

これらの定義から、中国における学校衛生教育と学校健康教育は実質的には同義とみなすことができる。本稿では両者を同義として扱い、学校健康教育を使用する。

表1に示した通り^{注2}、現在（2022年7月）、中国における高等学校までの学校健康教育は、生徒の発

達段階に応じて、レベル1（小学校1～2年）、レベル2（小学校3～4年）、レベル3（小学校5～6年）、レベル4（中学校）、レベル5（高校）の5つのレベルに分けられている。学習内容については、「①健康行動と生活様式」、「②疾病予防」、「③心の健康」、「④発育発達と思春期保健」、「⑤安全、応急手当と避難」の5領域が設けられ、レベルごとに定められている。各レベルの内容は相互に繋がりが、学校健康教育の全体的な目標の達成が目指されている^{4) 5)}。

学校健康教育の機会と方法については、「学校は教科教育、クラス会、校会、共産主義青年団会議、国旗掲揚式、講座、壁新聞、黒板新聞など多様な教育機会や方法を通じて健康教育を繰り広げる。教科教育は主に『体育と健康』を通じて実施し、授業時間は毎学期6～7時間である。健康教育の授業の実施は柔軟性を持たせ、雨、雪、高温、厳寒などの室外の体育の授業が行われない場合は、健康の授業を実施してもよい。また、小学校では『品德と生活』、『品德と社会』など、中学校と高校では『生物』など、他の教科の学習内容としても実施する。各教科で扱わない内容については総合実践活動^{注3}と地方課程^{注4}の時間を利用する」⁴⁾と定められている。

上記の通り、中国の学校健康教育に関する教科教育は、「体育と健康」を主としながらも、複数の他の教科においても行われている。こうした教科構成は、日本と類似している。日本でも、「保健体育」という独立の教科とともに、他教科（理科、家庭科、社会科、生活科など）において保健の教育内容に関連する学習が行われている⁶⁾。したがって、日中両国の学校健康教育に関する教育課程を比較検討することによって、相互の教育課程の改善に資する情報が得られることが期待できる。

これまで、中国では、日本の学校健康教育については、明治以降現在までの法律・政策や教育課程など、幅広い情報が数多くの研究で紹介されてきた^{7) -11)}。それに対して日本では、中国の学校健康教育を全体

1) 東北大学大学院教育学研究科

2) 仙台大学

3) 東北大学

表1 各レベルにおける学校健康教育の目標と領域・内容（2022年7月時点）

レベル	目標	領域	内容
小学校 1～2年	個人の衛生習慣が健康に与える影響が分かる。基本的な衛生習慣を形成する。目と歯の保護に関する知識が分かる。偏食が健康に与える影響が分かる。良好な食習慣・水を飲む習慣を形成する。自分の体を知り、自分を守るための知識を身につける。コミュニケーション能力を育成する。交通安全と安全に遊びに関する一般常識が分かり、救助を求める方法を身につける。環境衛生と健康の関係が分かり、基本的な環境衛生を維持する意識を確立する	①健康行動と生活様式	唾棄の吐き捨て禁止。ゴミのポイ捨て禁止。咳エチケット。体を清潔に保つこと（アタマジラミの予防に関する内容を含む）。タオルや歯ブラシなどのものの共有は禁止すること（トラコーマの予防に関する内容を含む）。屋外排泄を禁止すること、トイレの後は手を洗うこと。正しい手洗い方法。正しい座り方・立ち方・歩き方、脊髄側弯症の予防。読書する時の正しい姿勢・書く時の正しい姿勢。目の体操。1日2回の歯磨き（朝と夜）、食後に口をすすぐこと。正しい歯の磨き方と良い歯ブラシ・歯磨き剤の選び方。虫歯の予防。健康のため水を飲むこと、1日に必要な水分量、煮沸した水を飲むこと。朝ごはんをきちんと食べること、1日3食の規律。偏食の害、偏食が健康に与える影響。よく牛乳を飲み、豆・豆製品を食べることのメリット。よく空気を入れ替えることは健康に有益。自覚にトイレの衛生を維持すること。蚊・蠅・鼠・ゴキブリは疾病を伝播すること
		②疾病予防	ワクチンを接種すると、伝染病を予防できること
		③心の健康	日常生活の中で人との会話のマナー、クラスメートと仲良くなる方法
		④発育発達と思春期保健	生命を育む、成長に関する基礎知識、「私はどこからきたのか」が分かる
		⑤安全、応急手当と避難	交通安全マーク。歩行者は基本的な交通ルールを守ること。乗車する時の安全知識。危険な遊びをしない、安全に遊び。爆竹で遊ぶ時の注意点。火で遊ばないこと、電源を安全に使用すること。文房具・玩具を使う時の衛生と安全。野生動物を遠ざけること、ペットとふざけあって遊ばないこと。犬のワクチン接種。救急電話のかけ方
小学校 3～4年	目の保護に関する知識、近視の予防に関する知識の把握を一層深め、正しい目の使い方が分かる。食品衛生に関する知識が分かり、食品の安全性に関する意識を確立する。運動と健康の関係が分かり、学校外での時間を合理的に配置する。タバコの害が分かる。腸管感染症、ありふれた呼吸器感染症と栄養不良などの疾病の基本的な知識と予防方法が分かる。不慮の事故の原因が分かり、事故防止と応急手当に関する知識が分かる。日常生活の中での安全常識が分かり、避難に関する技能を身につける。生命の意義と価値が分かり、生命を保護する意識を確立する	①健康行動と生活様式	読書する時・書く時、テレビを見る時、パソコンを使う時の注意事項。近視の予防。眼外傷の予防。汚い、腐りやすい、賞味期限と消費期限切れの食品を食べないこと。野菜・果物を食べる前に洗うこと。人間に必要な栄養素。運動は発育発達と疾病の予防にメリットがあること。睡眠衛生、ゴミを分別して捨てること。タバコに含まれる有害物質が分かり、受動喫煙を防止すること
		②疾病予防	回虫病など腸内寄生虫病の害と予防。栄養不良と肥満の害と予防。伝染病が分かる（伝染病の伝播）気道感染症の予防。霜焼けの予防。児童生徒へのワクチンの接種
		③心の健康	他人に関心を持ち、他人を尊重する。障害のある人への対応
		④発育発達と思春期保健	人間のライフサイクルは誕生、発育、成熟、老衰、死亡を含むこと。児童・青少年の体における主要な器官の機能が分かり、自分を守るための知識を身につける
		⑤安全、応急手当と避難	水泳とスケートをする時の安全知識。薬物・化粧品を乱用しないこと。火災時の安全な逃げ方と救助を求める方法。地震が起きた時の逃げ方と救助を求める方法。動物に噛まれた時の応急処置。鼻血が出た時の対処法。出血した時の応急手当
小学校 5～6年	健康とは何かと健康的な生活様式が分かり、健康意識を形成する。栄養が児童少年の発育発達に与える影響が分かり、栄養に対する正しい観念を確立する。食品衛生に関する知識が分かり、良好な食習慣を形成する。喫煙の害が分かり、「タバコは健康に悪い」という意識を確立する。麻薬の害が分かり、「麻薬を遠ざける」という意識を確立する。ありふれた腸管感染症と虫媒伝染病に関する知識と予防方法を身につける。地方病が分かる（ヨード欠乏症と住血吸虫病の予防方法）。思春期の発育発達に関する知識が分かる。生活中の安全の常識が分かり、自己保護能力を高める	①健康行動と生活様式	健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあること。健康的な生活様式（合理的な食生活、禁煙、適度な飲酒 など）、穀物を主とし、野菜・果物・いも類もよく食べる方がいい、栄養バランスの良い食事をすること。適切な食事（暴飲暴食・盲目的なダイエットをしない、適量のおやつを食べる）、食品購入時の注意点（製造年月日、消費期限 など）。食中毒を起こしやすい食べ物、野生の植物、野生の果実を食べないこと。運動する時の自己観察。眼病の予防と対策。喫煙と受動喫煙はがん・心血管疾患・呼吸器疾患など多種多様な病気を引き起こす可能性があること、飲酒・喫煙しないこと。乱用されている薬物の名称と害、自己防衛の方法・常識、薬物乱用防止
		②疾病予防	貧血の害と予防、腸管感染症の予防、マラリアの予防、急性結膜炎の予防、ヨウ素欠乏症の予防、住血吸虫病の予防
		③心の健康	自分に自信を持つ、自分のことは自分でやる
		④発育発達と思春期保健	思春期の発育・発達の特徴。男女の2次性徴の違い。初潮の基礎知識（月経の仕組みと周期の計算）。夢精とは。変声期の保健知識。思春期の健康知識、体温測定、脈拍測定の方法と意義
		⑤安全、応急手当と避難	自転車に乗る時のルール。危険マーク。危険物を遠ざけること。ガス中毒の原因と予防。感電・落雷の予防。熱中症の予防と対策。火傷・切り傷などの応急手当。インターネットを利用する時の防犯意識を向上すること
中学校 1～3年	生活様式と健康の関係が分かる。健康的なライフスタイルを形成する。栄養バランスに関する知識の把握を一層深め、科学的な食習慣を形成する。十分な睡眠は体の発育に大切である。食中毒の基礎知識を身につける。ありふれた伝染病の予防に関する知識の把握を一層深める。エイズに関する基礎知識と予防方法が分かり、薬物乱用防止のための基礎知識が分かる。思春期の心の発達の特徴が分かり、感情をコントロールする方法を身につける。思春期の発育に関する知識の把握を一層深め、思春期の健康に関する知識と思春期に起こりやすい健康問題の予防・対処法を把握する。セクハラとは、セクハラの方法と技能を身につける。薬を安全に使用する。応急手当の基礎知識を身につける。インターネットのメリットとデメリットを了解し、合理的な使い方が分かる	①健康行動と生活様式	不良なライフスタイルは身体に健康にデメリットがあること。非感染性疾患と不健康なライフスタイルの関係。栄養バランスのよい食事は体の健康によいこと。思春期の栄養に関する知識。十分な睡眠をとることの大切さ。食中毒の原因。病死の動物が発見された場合は報告し、病死の動物の肉を食べないこと。食品の保存、喫煙・飲酒の拒否方法。薬物の乱用は、個人の健康影響ばかりでなく家庭や社会にも大きな影響を及ぼすこと、薬物乱用の拒否方法、薬物乱用は法律違反すること
		②疾病予防	脳炎の予防。疥癬の予防。肺結核病の予防。肝炎の予防。肝炎患者を差別しないこと。エイズの基礎知識と予防法。安全行動と不安全行動を判断し、不安全行動をしないこと。救助を求める方法を身につける。エイズと感染症の予防、薬物乱用とエイズ、HIV感染者とエイズ患者を差別しないこと
		③心の健康	負の感情が健康に与える影響。感情をコントロールする方法。自己認識、客観的に自分を見ること。自分の学習能力と状況に基づいて学習目標を設定すること。異性と交際の原則
		④発育発達と思春期保健	生活を愛し、生命を大切にすること。思春期の心の発達の特徴、思春期の心の変化への対応。ニキビの原因・予防方法。月経期の衛生知識、生理痛の症状と対策。ブラジャーの正しい選び方・着け方
		⑤安全、応急手当と避難	病気になったら病院に行くこと。医師の指示に従って薬を飲むこと。薬物を乱用しないこと。薬物乱用防止のための基礎知識。毒物劇物中毒の際の一般的な応急措置方法。溺れた時の応急手当。骨折の応急処置、セクハラへの予防、セクハラから身を守る。インターネット依存症の予防
高校 1～3年	「中国国民食生活指針」の内容が分かり、食品の選択と購入に関する知識を理解する。エイズに関する知識の理解を一層深め、HIV感染者・エイズ患者を正しく対応する。良好な人間関係を構築することを学び、コミュニケーション能力を育てる。ストレス解消法を身につける。思春期の保健知識の把握を一層深める。婚前交渉の害を認識し、貞操観念を性徳を育成する	①健康行動と生活様式	食品の選択と購入に関する基本的な知識、「中国国民食生活指針」の内容
		②疾病予防	エイズの予防に関する知識と方法。エイズの流行及びエイズが社会経済に与える害、HIV感染者とエイズ患者の違いのこと。HIVのウィンドウ期と潜伏期間。無償献血に関する知識。HIV感染者とエイズ患者を差別しないこと
		③心の健康	人に思いを打ち明けることと心の中の不満や怒りなどを吐き出すことの合理的な方法、物事を客観的に見ること。人間関係構築の原則と方法、積極的な態度・公平な態度、誠実さ、謙虚さ、寛大な心を持ちながら持ちながら人間関係を構築すること。ストレスの解消方法。積極的に競争することの意義と挫折に対して正しく向き合うこと。受験期などの特別な時期の精神障害と対応方法
		④発育発達と思春期保健	生活を愛し、生命を大切にすること。思春期の発達障害、発達障害があれば必ず病院に行くこと。婚前交渉を避けること、婚前交渉が青少年の心身の健康に悪影響を与えること
		⑤安全、応急手当と避難	インターネットで友達作ることの危険性

注：この表は中国教育部が公布した「中小学健康教育指導綱要」（2008）⁴⁾と中国衛生部（日本の厚生労働省に相当する政府機関）が公布した「中小学健康教育規範」（2011）⁵⁾に基づき作成したものである。

的に紹介した研究は、国立教育政策研究所による「保健のカリキュラムの改善に関する研究—諸外国の動向—」だけである。ただし、そこでは、2000年前後の教科や内容などの構成しか報告されていない¹²⁾。その他、学校健康教育に関する個別の領域・教科を紹介したものがある。例えば、山田(2016)は中国の心の健康教育について、多くの中国の先行研究を整理し、教育目標、学習内容、課題などを紹介した¹³⁾。また、深見(2008)は中国の学校体育制度について検討し、その中において、「体育」で扱う健康教育の内容について紹介した¹⁴⁾。このように、日本では、中国建国以降の学校健康教育に関する教育課程の歴史の変遷を体系的にまとめて紹介するものは管見の限り見られない。

なお、中国においても、中国における学校健康教育の歴史の変遷を扱った研究としては、張芯らによる「学校健康教育実践与理論」(2011)¹⁵⁾、元英による「改革开放以来我国中小学健康教育的發展歷程、特征与启示」(2019)¹⁶⁾がある。しかし、これらの先行研究は、学校健康教育に関する政策の歴史の変遷を体系的にまとめ、現状や特徴などを明らかにするものであり、教育課程の歴史の変遷については言及されていない。

そこで、本稿では、日中両国の学校健康教育に関する教育課程を比較検討するための基礎資料として、中国建国以降の学校健康教育についての教育課程の歴史の変遷を概観し、教育課程の構成の動向と特徴を明らかにすることを目的とする。

II. 学校健康教育の歴史の変遷

中国における教育の発展に従って、学校健康教育に関する教育課程の歴史の変遷は4つの時期に分けられると考えられる(ただし、1966~1977年の文化大革命時期は除く)^{注5)}。各時期の特徴は下記の通りである。

- ・ 時期Ⅰ：1949~1977年。建国から文化大革命の終了までの時期である。この時期は、小学校、高校の学校健康教育に関する内容は、「自然」^{注6)}、「生物」の中で扱われていた。中学校では、「生物」の中で扱われた時期と、「衛生常識」という独立の教科として実施された時期もあった。
- ・ 時期Ⅱ：1978~1989年。文化大革命以降、学校健康教育の法規(条例)が制定される以前まで

の時期である。小学校、高校の学校健康教育は他教科の中で扱われていたが、中学校では、「生理衛生」という独立の教科として実施された。

- ・ 時期Ⅲ：1990~2000年。学校健康教育の法規(条例)が制定されてから、現行の教育課程の実施以前までの時期である。小学校、中学校の学校健康教育は「健康教育」という独立の教科として実施された。

- ・ 時期Ⅳ：2001年以降。現行の学校健康教育課程の実施以降である。学校健康教育は新設された「体育と健康」と関連教科の中で扱われる。

以下、学校健康教育に関する教育課程を4つの時期ごとに概観する。

2.1 時期Ⅰ：1949~1977年

中国建国から文化大革命の終了まで(1949~1977年)の間は、学校健康教育に関する法規と方針がまだ整備されていない。学校健康教育は国務院^{注7)}及び教育部の指示に従って行われた。また、「中ソ友好同盟相互援助条約」(1950)の締結以降、「ソ連の進んだ経験に学べ」という思想のもと、中国教育界では全面的にソ連の教育を学ぶ運動が全国的に繰り広げられ、教育制度、教育方法、教材などはソ連の影響を受けた¹⁷⁾¹⁸⁾。

1951年、国務院は、児童・生徒・学生の健康状態が非常に劣悪なことを指摘し、各学校では、計画的な衛生教育を通じて、児童・生徒・学生に良好な衛生習慣を身に付けさせることを強調した¹⁹⁾。その後、生徒の健康状態をより改善するために、国務院は、1954年に再び各学校種で衛生教育を行うことの重要性を提起した²⁰⁾。

以下、小学校、中学校、高校に分けて、各学校種における教科構成、配当学年、授業時数を規定した「教学計画」^{注8)}とそれに即して作成された「課程標準」あるいは「教学大綱」^{注9)}に基づいて、教科及びそれらの配当学年と授業時数、教育目標と学習内容の変遷について述べる。その際、準拠すべき「課程標準」あるいは「教学大綱」の実施期間に応じて、時期Ⅰをさらに細分化した(時期Ⅱ~Ⅳも同様)。

2.1.1 小学校

(1) 1950~1955年(表2の①参照)

①教科

この時期、健康に関する内容は、「自然」の中で扱われた。

表2 時期Ⅰの小学校における健康に関する内容の変遷

年	教科	配当学年	単元	内容
① 1950～1955 「小学高年級自然課程暫行標準初稿」(1950) ²³⁾	自然	4・2制:5年 5年制:4年	生理衛生常識	①人体の構造、②呼吸器官の機能と保健、③消化器官の機能と保健、④循環器官の機能と保健、⑤排泄器官の機能と保健
			医薬常識	①微生物と伝染病、②予防接種、③飛沫感染、④胃腸の感染症、⑤昆虫媒介感染症 ⑥外傷の手当、⑦救急法
		4・2制:6年 5年制:5年	生理衛生常識	①脳・神経の機能と保健、②耳・目の機能と保健、③精神衛生に関する常識の概要 ④身体の休憩と鍛錬、⑤食物と栄養の関係、⑥環境衛生、⑦公衆衛生事業
			医薬常識	①皮膚病の予防と治療、②常用の薬物の紹介、③看護に関する一般常識
② 1956～1962 「小学自然教学大綱(草案)」(1956) ²⁴⁾	国語	1年	人体と保健	①人体各部位、②学校衛生に関する初歩的な規則、③個人の衛生習慣と自分の体を世話する方法
		2年	保健	①不慮の事故防止、②睡眠衛生
		3年	保健	①飲食衛生規則、②歯の保護、③蠅の予防と退治、④目の保護
		4年	人体と保健	①骨格、②筋肉、③内部器官(呼吸器官・消化器官・循環器官・排泄器官) ④脳・骨髄・神経・感覚器官、⑤器官の保健、⑥腸内寄生虫、⑦伝染病
	自然	5年	水	水と人体の健康
			空気	綺麗な空気的重要性
6年	保健	①体質増強の措置、②人間を危害する疾病を撲滅するための奮闘		
③ 1963～1966 「全日制小学自然教学大綱(草案)」(1963) ²⁵⁾	自然	6年前期	人体保健	①私たちの身体(人体各部位の名称、身体の構造、人体の活動)、②骨格、筋肉の衛生(人体における骨の形、骨の役割、骨の衛生:脊柱変形の予防と矯正・骨折と脱臼の予防及び応急手当)、③消化器官の衛生(人体の消化器官、消化器官の働き、消化器官の衛生:飲食の衛生・菌の衛生)、④食物の栄養(なぜ食事をするのか、栄養成分の種類と働き、栄養衛生:食物の多様性・合理的な調理法)、⑤呼吸器官の衛生(人体の呼吸器官、なぜ呼吸をするのか、呼吸衛生:鼻で呼吸・新鮮な空気を呼吸する)、⑥血液循環器官の衛生(人体の血液循環器官、血液循環の働き、血液循環器官の衛生:心臓の保護と鍛錬・タバコと酒の害・出血と止血)、⑦排泄器官の衛生(人体の排泄器官、なぜ排泄をするのか、皮膚の衛生:熱中症の予防と応急手当・皮膚の清潔保持・霜焼けの予防)、⑧感覚器官の衛生(人体の感覚器官、感覚器官の衛生:近視の予防・耳の疾病の予防)、⑨神経系の衛生(神経系の働き、神経系の衛生:脳の保護と鍛錬・仕事と休息のバランス・睡眠衛生)、⑩中毒の予防(食物中毒の予防、農薬中毒の予防、ガス中毒の予防)、⑪寄生虫病の予防(寄生虫病とは、回虫病・蟻虫病・住血吸虫病の予防)、⑫伝染病の予防(伝染病とは、下痢・風邪・破傷風・トラコーマの予防)

②配当学年と授業時数

小学校の学校制度はまだ統一されておらず、4・2制¹⁰⁾小学校の「自然」の配当学年は5～6年であり、5年制¹¹⁾小学校の「自然」の配当学年は4～5年であった。

授業はいずれも週3回であり、授業時数は2年間で合計228時間であった²¹⁾。しかし、1950年公布の「自然」に関する「課程標準」では、健康に関する内容の授業時数を明確に定められなかった²²⁾。

③教育目標と学習内容

「自然」における健康に関する内容の教育目標は、「児童に生理衛生に関する基礎的な知識と薬の常識を獲得させ、個人の保健意識・習慣と公衆衛生に関する意識・習慣を身に付けさせる」²²⁾ことであった。このような教育目標に沿って、「自然」では、「生理衛生常識」と「医薬常識」という2つの単元が設けられ、各器官系の構造と働きや伝染病、予防接種などの健康に関する学習内容が扱われた²²⁾。

(2) 1956～1962年(表2の②参照)

①教科

学校健康教育は1950～1955年と同様に、「自然」の中で扱われた。

②配当学年と授業時数

1956年以降、小学校は6年制になった²³⁾。学校制度の変更に従って、「自然」の配当学年は1～6年になった²³⁾。1956年公布の「教学大綱」によれば、「自然」は5～6年(授業は週2回、授業時数は2年間で合計136時間)に実施され、1～4年では、「自然」に関する内容は「国語」(授業は1～4年週12回、5～6年授週10回、授業時数は6年間で合計2312時間)の中で扱われた。各学年の健康に関する内容の授業時数は、1年:5時間、2年:4時間、3年:2時間、4年:6時間、5年:6時間、6年:6時間、合計29時間であった²⁴⁾。

③教育目標と学習内容

健康に関する内容の教育目標は、「児童に保健知識を獲得させ、衛生習慣と基礎能力を身に付けさせる」²⁴⁾ことであった。学習内容は学年ごとに配置され、人体の仕組みと働きなどの内容が扱われた²⁴⁾。

表3 時期Ⅰの中学校における健康に関する内容の変遷

年	教科	配当学年	単元	内容
① 1950～1951 「初中自然課程標準草案」(1951) ²⁴⁾	自然	2年	序論	①人体は働いている機械、②生理衛生学の意義
			人体の基本構造と働き	①細胞の構造・成分と働き、②細胞分裂、③基本組織、④器官と系統、⑤人体の構造
			運動	①骨の構成、構造、役割と成分、②筋肉の構造と働き、③身体の運動と衛生、④骨折と脱臼の応急手当
			循環	①血液の構成と働き、②循環器官の構造と働き、③リンパ液とリンパ管、④循環器官の疾病、保健と止血法
			呼吸	①呼吸とは、②呼吸器の構造、③呼吸の方法と働き、④発声器の構造、⑤呼吸器官の疾病、保健と人工呼吸
			栄養	①人体活動のエネルギー源、②食品中の栄養素とビタミンの価値、③栄養標準、④消化器官の構造、働きと栄養の吸収 ⑤イワン・ペトロヴィチ・パプロフの成果、⑥消化器官の疾病と保健
			排泄	①排泄とは、②泌尿器の構造と働き、③皮膚の構造と働き、④排泄器官の疾病と保健、皮膚の傷の応急手当
			神経系	①神経系とは、②神経の構造と働き、③神経系の構成と各部分の働き、④神経系の疾病と保健
			感覚	①感覚の種類、②皮膚の触覚作用、③目、耳、鼻、舌などの構造、働き、疾病と保健
			内分泌	①内分泌とは、②甲状腺、ランゲルハンス島、副腎、脳下垂体、男性・女性の性腺の構造と働き
			生殖と発育	①思春期とは、②男女生殖器の構造、働きと保健、③受精と胎芽の発育、④児童と少年の発育の要素
			公共衛生	①公衆衛生の重要性、②家庭、学校、鉱工業と町の衛生
まとめ	①人体各部分の繋がり、②健康増進			
② 1952～1957	衛生常識	1年	序論	①衛生常識の概念について、②衛生常識を学習する意義、③衛生常識の学習方法
			私たちの身体	①人体の概念、②各器官の位置
			骨格	①脊柱、②頭骨と胸骨、③四肢の骨、④骨の繋がり
			筋肉	①人体の筋肉、②筋肉の鍛錬と保健
			消化	①食物、②食物の消化、③歯の保健、④ビタミン、⑤飲食の衛生
			呼吸	①呼吸器官、②呼吸の衛生
③ 1958～1962	※「衛生常識」が廃止され、中学校では学校健康教育に関する授業がなくなった			
④ 1963～1966 「全日制中学生物教学大綱(草案)」(1963) ²⁵⁾	生物	2年後期	序論	①生理衛生の内容、②我が国の衛生事業の成就、③生理衛生を学習することの意義と方法
			人体概論	①人と動物の細胞の構造、人と動物の細胞と植物の細胞の違い、②人体における上皮組織・結合組織・筋肉組織・神経組織の分布・構造・生理、③器官と系、④生物は1つの整体
			運動器官の構造、生理、衛生	①運動器官の構成、②人体にける骨の概説、③骨の構造・成分・成長、④骨の連結、⑤人体における筋肉の概説、⑥筋肉の動き ⑦体力労働・体育運動と人体健康の関係
			循環器官の構造、生理、衛生	①循環とは、②血の成分-血球と血漿、③血漿の成分と機能、④赤血球の構造と機能、⑤動脈血と静脈血の定義、⑥貧血の原因・症状・予防、⑦白血球の構造と機能、⑧炎症と免疫、⑨血小板の機能と血の凝固、⑩輸血とは、⑪血液型、⑫心臓の構造、⑬動悸、⑭心臓と身体運動について、⑮血管の種類と構造、⑯体循環と肺循環、⑰血循環の発見、⑱血圧、⑲脈拍、⑳血液の配分、㉑血循環の神経調節、㉒出血の応急手当、㉓リンパとリンパ循環-リンパの形成、㉔血・組織液・リンパの関係、㉕体液と内環境、㉖リンパ系の分布とリンパ循環、㉗リンパ節の免疫機能
			呼吸器官の構造、生理、衛生	①呼吸とは、②呼吸器官-気道と肺の構造、③気道粘膜の免疫機能、④気体交換、⑤空気と人体健康の関係、⑥新鮮な空気を維持する措置、⑦呼吸運動、⑧肺の換気量、⑨肺活量と人体健康の関係、⑩人工呼吸の原理、⑪呼吸運動の神経調節と二酸化炭素調節
			消化器官の構造、生理、衛生	①食物とは、②食物の成分、③消化とは、④消化管と消化腺の構造、⑤消化酵素の働きと特性、食物の消化、⑥消化液分泌の神経調節 ⑦栄養素の吸収、⑧便の形成、⑨便秘の原因・害・予防、⑩肝臓の貯蔵と防御機能、⑪歯の衛生、⑫胃腸病の予防
			新陳代謝と栄養衛生	①新陳代謝とは、②物質代謝、③代謝中ビタミンの働き、④エネルギー代謝、⑤体温調節、⑥熱中症の原因・症状・応急手当
			排泄器官の構造、生理、衛生	①排泄とは、②排泄の経路、③泌尿器の構成、④腎臓の構造、⑤尿の生成・成分・排出、⑥排尿の神経調節、⑦皮膚の構造と生理
			内分泌器官の構造、生理、衛生	①内分泌腺とは、②ホルモンとは、③甲状腺の位置と形態、④甲状腺ホルモンの影響、⑤甲状腺病気の発生と予防 ⑥脳下垂体・副腎・性腺の位置と機能に関する概説、⑦体液調節の定義と人体中の働き、⑧体液調節と神経調節の関係
			神経系の構造、生理、衛生	①神経系の概要、②脊髄の位置・形状・構造・生理、③脳の構造と機能、④脳の進化と人脳の特徴、⑤分析器の定義と構成部分(光分析器-構造・視覚の形成・水晶体の調節・近視と遠視の原因と予防・目の衛生、声分析器-構造・聴覚の形成・耳の衛生、嗅覚・聴覚・皮膚感覚、運動感覚器官の構造と生理、分析器の相互作用と鍛錬)、⑥高級神経活動(ハヴロフ高級神経活動学説、非条件反射と条件反射、条件反射の形成過程と原理、条件反射の制御、睡眠と夢、人の高級神経活動の特徴：第一・第二信号系の定義と両者の関係)、⑦神経系の衛生：睡眠の衛生、⑧働きと休み、⑨タバコ・酒の害
			生殖と発育	①男性・女性生の殖器の構造、②生殖細胞-精子と卵細胞の構造、③月経と排卵・受精、④母体中の胎児発育、⑤発達段階における各時期の特徴、⑥各発達段階の衛生保健、⑦計画出産の意義
			健康の維持、身体素質の増強	①健康維持の意義と方法、②伝染病の予防、③環境衛生、④労働衛生、⑤愛国衛生運動

¹ 1950年公布の中学校の「教学計画」によれば、中学校における「自然」は1950年から設立したが、「自然」に関する「課程標準」は1951年に公布したものである。

² 衛生常識の教学大綱は入手困難のため、文献³⁴⁾の内容をもとに作成した。

(3) 1963～1966年(表2の③参照)

①教科

この時期、健康に関する内容は、引き続き「自然」の中で扱われた。

②配当学年と授業時数

1963年以降、「自然」の配当学年は5～6年だけに戻り、週当たりの授業回数は変化しなかったが、授業時数は2年間で合計142時間に増加した²⁵⁾。その中に、健康に関する内容の配当学年は6年前期であ

り、授業時数は13時間であった²⁶⁾。

③教育目標と学習内容

「自然」に関する「教学大綱」は1963年に再度改訂されたが、教育目標は1956年公布の「教学大綱」とほぼ変わらず、「児童に保健知識を獲得させ、良好な衛生習慣を身に付けさせる」ことであった。学習内容としては、引き続き人体の仕組みと働きや伝染病などの内容が扱われた²⁶⁾。

2.1.2 中学校

(1) 1950～1951年 (表3の①参照)

①教科

この時期、健康に関する内容は、「自然」の中で扱われた。

②配当学年と授業時数

「自然」の配当学年は1～2年であり、授業は1年週4回、2年週1回、授業時数は2年間で合計200時間であった²⁷⁾²⁸⁾。その中に、健康に関する内容の配当学年は2年であり、授業時数は20時間であった²⁹⁾

③教育目標と学習内容

健康に関する内容の教育目標は、「生徒に人体の構造、その構造と生活の関係を理解させ、生理衛生に関する知識を獲得させた上で、身体の健康を増進させる」²⁹⁾ことであった。学習内容は「植物学」、「動物学」、「生理衛生学」という3つの領域に分けられ、健康の内容を扱うのは「生理衛生学」領域であり、「人体の基本構造と働き」や「運動」などの13単元が設けられた²⁹⁾。

(2) 1952～1957年 (表3の②参照)

①教科

1952年に、「自然」は「生物」と改称され、健康に関する学習内容は高校に移された³⁰⁾。それを補うために、1952～1957年の間は、中学校では、「衛生常識」という独立の教科が新設された^{31)・34)}。

②配当学年と授業時数

1952年からの「衛生常識」の配当学年は1年であり、授業は週1回、授業時数は合計36時間であった^{31)・34)}。

③教育目標と学習内容

「衛生常識」の教育目標は、「生徒に衛生・保健の知識を教え、必要な衛生習慣を身に付けさせる」ことであった³⁵⁾。学習内容としては、「私たちの身体」、「骨格」など6つの単元が設けられた³⁵⁾。

(3) 1958～1962年 (表3の③参照)

1958年以降、「衛生常識」は廃止され、1962年までの間、中学校では、学校健康教育に関する授業がなくなった³⁶⁾。

(4) 1963～1966年 (表3の④参照)

①教科

1963年以降、中学校の「生物」の中に、健康に関する内容が再度移行された³⁷⁾³⁸⁾。

②配当学年と授業時数

「生物」の配当学年は1～2年であり、授業は1年週2回、2年週3回、授業時数は2年間で合計245時間であった³⁷⁾。その中において、健康に関する内容の配当学年は2年の後期であり、授業時数は51時間であった³⁸⁾。

③教育目標と学習内容

教育目標について、1963年公布の「教学大綱」では、「有機体の基礎知識とその知識の衛生・保健領域への応用を理解させる」という全体的な教育目標が定められた上で、健康に関する内容に対して、「人体の構造と生理に関する知識を獲得させた上で、その知識の応用力を身に付けさせる。また、衛生・保健に関する知識を把握させる」という具体的な目標が定められた³⁸⁾。学習内容は同期の「自然」と同様に、「植物学」、「動物学」、「生理衛生」という3つの領域に分けられた。健康に関する内容を扱う「生理衛生」領域は、人体の構造と働きなどの内容を中心として新たに12単元が設けられた³⁸⁾。

2.1.3 高校

(1) 1952～1962年 (表4の①参照)

①教科

この時期、健康に関する内容は、「生物」の中で扱われた。

②配当学年と授業時数

1952年からの「生物」の配当学年は1～2年であり、授業は週2回、授業時数は2年間で全144時間であった^{31)・34)36)}。その中において、健康に関する内容の配当学年は1年であり、授業時数は72時間であった³⁰⁾。

③教育目標と学習内容

1952年公布の「教学大綱」によれば、「生物」における健康に関する内容の教育目標は、「生徒に人体の構造と機能に関する知識を獲得させ、人体の健康の維持・増進に関する能力を育成する」³⁰⁾ことであった。学習内容は「人体解剖生理学」と「ダーウィニズム基礎」という2つの領域に分けられた³⁰⁾。健康の内容を扱うのは「人体解剖生理学」領域であり、「骨格筋肉」や「血液循環器官」などの11単元が設けられ、人体の構造と働きに関する内容が扱われた³⁰⁾。

(2) 1963～1966年 (表4の②参照)

①教科

この時期、健康に関する内容は引き続き「生物」の中で扱われた。

表4 時期Ⅰの高校における健康に関する内容の変遷

年	教科	配当学年	単元	内容
① 1952～1962 「中学生物教学大綱(草案)」 (1952) ³⁸⁾	生物	1～2年	人間の身体を1つの統一性ある有機体	①人体の細胞の構造、動物細胞の構造、細胞の化学成分、動物細胞と植物細胞の同異点、細胞と細胞の代謝、細胞の増殖、②動物組織の種類、器官と系、③人体は1つの生体
			骨格筋肉	①骨格系・筋肉系とは、軟骨組織と硬骨組織、骨の成分と性質の変化、海綿骨とは、幹細胞と黄色骨髄、骨の成長、②骨の連結の種類、関節の構造、脱臼・骨折の救急手当、③人の骨の形、人と脊椎動物の骨格構造の特徴と人類の起源、④横紋筋、横紋筋の構造、筋肉と骨の繋がり、筋肉の基本的な特徴、筋肉収縮の原因、横紋筋の基本筋肉群、⑤筋肉の働き、筋肉の律動と負荷の意義、筋肉の神経調節、筋肉の人への影響
			血液循環器官	①血液の循環とは、心臓の位置と構造、心臓収縮の規律、心臓の自動性、②血液は血管の中に流れる、動脈・静脈・毛細血管の構造と特徴、血圧、脈拍、血液の流れの速さの変化、リンパの生成とリンパ循環、リンパ腺とは、③血液循環の調節、心臓と血管の神経調節、心臓の神経支配と血管の働き、④血液の構成：血漿、白血球と赤血球、血球の形成、ヘモグロビン、⑤血液の凝固と出血の救急手当、⑥血液の保護性、獲得免疫、ワクチン接種と血清療法、宗教と感染症、我が国における感染症と戦った成果、⑦輸血
			呼吸器官	①呼吸器官とは・呼吸器官の構造と位置、喉頭の発声機能、②吸気と呼気の成分、肺内と組織内の気体交換、ガス中毒の救急処置、③呼吸運動、肺活量、人工呼吸、④資本主義国家の労働者のありふれた疾患-結核病、結核病の予防、⑤呼吸衛生
			消化器官	①栄養とは、食物の成分、②消化とは、消化酵素、口腔・歯の構造、歯と保護、唾液腺、口腔内での食物の変化、飲み込む、③胃の構造、胃液、胃液の働きと保護性、膵臓と膵液の働き、肝臓と胆汁の働き、小腸と腸液の働き、小腸絨毛の働き、肝臓の役割、大腸の働き
			新陳代謝	①新陳代謝と生命活動、異化と同化、異化作用、②酵素の働き、タンパク質・脂肪・炭水化物の新陳代謝、インシュリンとアドレナリンの働き、肝臓の働き、③神経による代謝調節、大脳皮質の作用、④栄養、タンパク質・脂肪・炭水化物のカロリー、栄養標準と食物定量、ビタミンの働き、栄養衛生
			排泄器官	①新陳代謝と排泄とは、腎臓の構造と働き、②尿の生成、排尿、尿の成分
			皮膚	①皮膚の構造、②皮膚の保護作用、③汗腺と皮脂腺、④皮膚が体温を調節する仕組み、⑤汗の役割、⑥皮膚の衛生、⑦熱中症・凍傷・やけどの応急手当
			内分泌	①外分泌腺と内分泌腺、②甲状腺・脳下垂体・生殖腺、③内分泌腺の調節、④神経性調節と体液性調節の関係
			神経系	①神経系とは、神経系の構造、中枢神経系と末梢神経系、神経の構造と性質、遠心神経と求心神経、②脊髄の構造、脊髄反射、脊髄反射の抑制、③脳の構造、人と脊椎動物の脳の違い、前脳・中脳・後脳の機能、④交感神経と副交感神経の働き、自律神経系と大脳皮質、⑤感覚器官、感覚器とは、皮膚の感覚器、嗅覚器官、味覚器官、身体姿勢の感覚、⑥目の構造、近視眼の予防、⑦聴覚器官、外耳・中耳と内耳、⑧神経系の衛生
人体発育の生理的特徴	①生殖細胞、②受精、③子宮内の発育、④母体と胎児の繋がり、⑤栄養と胎児の発育、⑥児童と少年の発育の特徴、⑦体育運動と発育発達、⑧我が国における母性と小児の保健			
② 1963～1966 「全日制中学生物教学大綱(草案)」 (1963) ³⁸⁾	生物	2年	原形質	①原形質とは、②炭水化物・脂肪・タンパク質・酵素・核酸・ビタミンの作用、③タンパク質と核酸の重要な役割
			生物体の構造	①細胞の形状と大きさ、②細胞の構造・機能、③動物細胞と植物細胞の違い、④細胞分裂
			生物の生理	①食物の消化と吸収、②有機化合物の輸送・利用・貯蔵、③呼吸、④排泄、⑤神経系の生理、⑥ホルモンとビタミン
			生物の生殖と発育	①有性生殖の意義・方式、②人の計画出産

②配当学年と授業時数

1963年以降、「生物」の配当学年は2年だけになり、週当たりの授業回数は2回のままであったが、授業時数は70時間に削減された³⁷⁾。その中に、健康に関する内容の授業時数は約22時間を占めた³⁸⁾。

③教育目標と学習内容

1963年公布の「教学大綱」によれば、「生物」の教育目標は、「生徒に生物学に関する知識(原形質、有機体の構造・生物の生理・生物の生殖と発育などの知識を含む)を深めた上で、その知識の応用力を育成する」³⁸⁾ ことであった。このような教育目標に沿って、「生物」の学習内容は全体的に改訂され、大幅に削減された。健康に関する学習内容は「原形質」、「生物体の構造」、「生物の生理」、「生物の生殖と発育」という4つの単元が設けられ、「原形質とは」、「炭水化物・脂肪・タンパク質・酵素・核酸・ビタ

ミンの作用」、「食物の消化と吸収」などの内容が扱われた³⁸⁾。

2.1.4 まとめ

時期Ⅰの学校健康教育は、児童生徒の良好な衛生習慣を形成することと伝染病を予防することを重点とした¹⁷⁾。各教科の授業時数と内容構成からみると、時期Ⅰの学校健康教育は、中学校において特に重視されていたと考えられる。また、全般的にみると、この時期の学校健康教育は模倣から始まり、そして改革という流れで進んだと考えられる。

まず、1949～1958年の間、中国はソ連の学校健康教育が全般的に模倣された。当時のソ連では、健康教育に関する内容は教育課程の一部分として行われ、小学校は衛生に関する基礎知識などの内容、中学校は人体解剖、人体機能、伝染病の予防などの内容、高校は人体解剖、人体生理などの内容が生徒に教え

られた³⁹⁾。中国では、小学校の「自然」、中学校と高校の「生物」の中において、ほぼ同様の内容が教えられた。しかし、ソ連の教育制度（7年制義務教育や10年制中等義務教育などの教育制度）と国内の状況（短期間で人材の育成を図ることや教員不足などの状況）が整合しないため⁴⁰⁾、各学校種において健康に関する学習内容を扱う教科それ自体、それらの配当学年、授業時数及び内容構成は試行錯誤が続いた。

1958年以降、中ソ関係の悪化に従って、中国の教育界はソ連の教育モデルから離れ、国情に合う教育モデルを探すことを求められ、教育改革が行われた⁴¹⁾。ソ連の教育と違い、1958～1960年の教育改革では、教育は日常生活・生産に結び、教条主義から離れることを目的とした⁴²⁾。60年代中期頃まで、小学校の「自然」、中学校の「生物」で扱う健康に関する内容は量的に増え、細分化された。

張ら（2011）によれば、建国から文化大革命までの学校健康教育の発展を全般的にみると、この時期は新中国における学校健康教育の好調な滑り出しと指摘された¹⁵⁾。

2.2 時期Ⅱ：1978～1989年

1978～1989年の間、学校健康教育の法規（条例）がまだ制定されなかったが、教育部は学校健康教育に関する方針をいくつか打ち出した。1979年に発出された「中、小学衛生工作暫行規定（草案）」は建国

以降、初めて明確に学校健康教育の目標と内容が定められた方針である。この規定では、「生徒の健康水準を高め、生徒に良好な衛生習慣を身に付けさせ、疾病予防対策を強化し、生徒がよく罹患する疾病の回復を進め、生徒の体をよりよく発育・発達させる」ことを学校健康教育の主な目標とした⁴³⁾。また、規定の第十条では、学校健康教育の独立の教科である「生理衛生」の授業を行うことと思春期の衛生教育を強化することが強調された⁴³⁾。しかし、教育現場では、担当教員の不足や授業実施の軽視などが原因で、多くの学校における「生理衛生」の実施状況は規定された授業時数と乖離していた⁴⁴⁾。そのため、教育部が1984年に発出した通達の中において、「生理衛生」の実施の重要性が更に強調し、担当教員が不足する場合、当地の医者が授業担当を兼任できると定められた⁴⁴⁾。

2.2.1 小学校

(1) 1978～1985年（表5の①参照）

①教科

1978年、「自然」は「自然常識」に改称され、学校健康教育はこの教科の中で扱われた⁴⁵⁾。1982年、小学校では、従来の「政治」の学習内容の幅を広げ、学校健康教育の内容を含む「思想品德」という教科が新設された⁴⁶⁾。

②配当学年と授業時数

「自然常識」の配当学年は4～5年であり、授業

表5 時期Ⅱの小学校における健康に関する内容の変遷

年	教科	配当学年	単元	内容
① 1978～1985 「全日制十年制学校 小学自然常識教学大綱（試行草案）」 （1978） ⁴⁵⁾ 、「全日 制五年制小学思想品德 课教学大綱（試行 草案）」（1982） ⁴⁹⁾	自然常識	5年前期	人の身体	①人体の構造、②人体の活動
			骨格と筋肉	①人体における骨の形、②骨と筋肉の働き、③骨と筋肉の保護と鍛錬
			消化器官	①消化器官の位置と働き、②消化器官の衛生（飲食の衛生、歯の衛生）
			呼吸器官	①呼吸器官の位置と働き、②呼吸衛生（鼻で呼吸、新鮮な空気を呼吸する）
			血液循環器官	①血液循環器官の位置と働き、②心臓の保護と鍛錬
			感覚器官	①感覚器官（目・耳・鼻・舌・皮膚）、②目・耳・鼻の衛生（近視の予防、耳の疾病の予防、鼻炎の予防）
			伝染病の予防	①伝染病とは、②細菌、ウイルスの侵入、③伝染病の予防方法
	寄生虫病の予防	①寄生虫病とは、②寄生虫の侵入、③寄生虫病の予防方法		
	思想品德 （1982年から 開設された）	1～5年	文明・礼儀 規律遵守	個人衛生の維持と衛生習慣の形成、公衆衛生の維持 交通安全教育 など
② 1986～1989 「全日制小学自然教 学大綱」（1986） ⁵⁰⁾ 「全日制小学思想品 德教学大綱」 （1986） ⁵³⁾	自然	5年制：2年 6年制：3年	生理衛生	①人体の主な骨、②骨の役割、③関節の働き、④筋肉の働き、⑤身体運動と骨・筋肉
		5年制：3年 6年制：4年	生理衛生	①人体に必要な栄養素（タンパク質・澱粉・脂肪・水・塩類）、②食の多様化の重要性、③人の消化・呼吸・血液循環とは、④消化器官・呼吸器官・血液循環器官の構成と働き、⑤消化器官の衛生、呼吸衛生、血液循環器官の衛生
		5年制：4年 6年制：5年	声と光	①耳の衛生保健、②近視の原因、近視の予防
		5年制：5年 6年制：6年	生理衛生	①神経系の構成、脳・脊髄・神経の働き、②神経系の衛生、③人の発育発達、④思春期の発育の特徴
		思想品德	5年制：1～5年 6年制：1～6年	文明・礼儀 規律遵守

は週2回、授業時数は2年間で合計136時間であった⁴⁷⁾。その中に、健康に関する内容は5年の前期に集中し、合計13時間の授業時数を占めた⁴⁵⁾。

「思想品德」の配当学年は1～5年であり、授業は週1回、授業時数は5年間で合計180時間であったが⁴⁸⁾、健康に関する内容の授業時数を明確に定めなかった⁴⁹⁾。

③教育目標と学習内容

「自然常識」の教育目標は、「生徒に分かりやすい自然科学の知識を教え、自然界と自然改造に関する知識を理解させ、生徒の知見を広げる」⁴⁵⁾ことであった。学習内容は時期Ⅰの「自然」とほぼ同様に、人体の構造と働きと疾病の予防に関する内容を中心とした⁴⁵⁾。

「思想品德」は道徳教育の独立の教科であり、生徒に道徳性を育成させ、正しいマナーを身に付けさせることを教育目標とした⁴⁹⁾。健康に関する学習内容については、「個人衛生の維持と衛生習慣の形成」、「交通安全教育」などが扱われた⁴⁹⁾。

(2) 1986～1989年(表5の②参照)

①教科

1986年以降、「自然常識」は再び「自然」に改称された⁵⁰⁾。その他、「思想品德」は引き続き健康に関する内容が扱われた。

②配当学年と授業時数

1986年以降に設置された「自然」の開設時期は「自然常識」より低学年になった^{51) 52)}。5年制小学校の「自然」の配当学年は1～5年であり、授業は1～2年週1回、3～5年週2回であった⁵¹⁾。6年制小学校の「自然」の配当学年は1～6年であり、授業は1～4年週1回、5～6年週2回であった⁵²⁾。5年間で6年間の授業時数はいずれも272時間であった^{51) 52)}。授業時数が大幅に増加されたが、健康に関する内容の授業時数は明確に定められなかった⁵⁰⁾。

5年制小学校の「思想品德」の配当学年と授業時数は1978～1985年の間と同様に、1～5年で週1回の授業(授業時数は5年間で合計180時間)が実施された⁵¹⁾。6年制小学校の「思想品德」の配当学年は1～6年であり、授業は週1回、授業時数は6年間で合計204時間であった⁵²⁾。

③教育目標と学習内容

「自然」における健康に関する内容の教育目標は、「児童に必要な生理・衛生に関する常識を獲得させ、良好な衛生習慣を身に付けさせる」⁵⁰⁾ことであった。

このような教育目標に沿って、教育部は児童生徒の年齢の特徴を配慮した上で、健康に関する内容を5年制小学校の2～5年と6年制小学校の3～6年に配置した⁵⁰⁾。具体的な内容は「自然常識」と同様に、人体の仕組みと働きに関する内容を中心とした⁵⁰⁾。

「思想品德」について、1986年公布の「教学大綱」では、5年制小学校、6年制小学校ともに使用できることが定められた以外、教育目標と学習内容はほぼ変わらなかった⁵³⁾。

2.2.2 中学校

(1) 1978～1985年(表6の①参照)

①教科

この時期、教育方針である「中、小学衛生工作暫行規定(草案)」(1979)に基づき、中学校段階では、学校健康教育の独立の教科として「生理衛生」が開設された。

②配当学年と授業時数

「生理衛生」の配当学年は2～3年の前期であり、授業は週1回、授業時数は1年半で合計48時間であった⁴⁷⁾。

③教育目標と学習内容

1978年公布の「教学大綱」では、「生理衛生」は人間の生命活動と衛生・保健の知識を研究する教科であると定義された⁵⁴⁾。そのため、教育部は、「①生徒に人体の構造と生理に関する基礎知識を把握させ、その知識を体育活動や日常生活に活用できるように指導する。②人体の各器官、思春期、身体運動、疾病予防などの衛生に関する知識を理解させ、運動習慣と良好な衛生習慣を身に付けさせ、心身の健康を促進する。③問題に対する分析能力、解決能力を育成させる。④教育内容と結合して思想政治教育が行われる。」⁵⁴⁾という4つの教育目標を定めた。学習内容については、小学校の「自然」と同じく、人体の構造と働きに関する知識を中心に、「人体の構成」、「運動器官」、「循環器官」などの単元が設けられた⁵⁴⁾。

(2) 1986～1989年(表6の②参照)

①教科

この時期、学校健康教育は引き続き「生理衛生」を通じて実施された。

②配当学年と授業時数

1986年以降、「生理衛生」の配当学年は3年だけになったが、授業は週2回、総授業時数は64時間に増加した⁵⁵⁾。

表6 時期IIの中学校における健康に関する内容の変遷

年	教科	配当学年	単元	内容
① 1978～1985 「全日制十年制学校中学生 生理衛生教学大綱（試行 草案）」（1978） ⁴⁴⁾	生理 衛生	2～3 年の 前期	序論	①生理衛生の内容、②我が国の衛生事業の成就、③偉大的導師毛沢東と党中央の青少年への配慮、④生理衛生を学習することの意義と方法
			人体の構成	①人体の構成の概略、②人体の基本的構成単位：細胞、細胞生理（物質交換、興奮性、寿命）の概略、③組織：細胞分化と組織形成、人体を構成する4つの組織（上皮組織、結合組織、筋肉組織と神経組織）の分布、構成特徴及び働き、④人体の器官の概要、⑤人体は1つの生体
			運動器官	①運動器官の構成・働き、②骨（頭骨・体幹の骨・四肢の骨の構成と機能、骨の構造と機能、骨の成長、骨の成分正しい姿勢をすることの意義、骨の連結、関節の構造、脱臼と脱臼の応急処置、リウマチ性関節炎の予防）、③骨格筋（筋肉の収縮特性、首筋肉、体幹筋肉、四肢筋肉の主要表層筋肉の働き、運動中筋肉の協力関係）、④運動器官の鍛錬と保健（体育鍛錬の骨・関節・筋肉への影響、体育鍛錬の注意事項）
			循環器官	①循環の概念、②循環器官の構成（血液循環系、リンパ系）、③血液循環系の構成（心臓と血管、その中に流れる血液）、④血液（血液の量、血液の構成：血漿と有形成分-赤血球・白血球・血小板、血漿成分と機能、赤血球の形態と機能、人体内の赤血球とヘモグロビンの量、貧血、白血球の形態と機能、炎症、人体内の白血球の量、血小板の機能、血液の凝固、血清、人体内の血小板の量、血球の生成と破壊、輸血と血液型）、⑤血管と心臓（血管の種類と特徴、心臓の位置と構造、心拍、動悸、心臓の輸血量）、⑥血液循環の経路：体循環と肺循環、動脈血と静脈血の概念、冠動脈循環、脈拍・血圧の概念、高血圧症の概念、青少年性高血圧症）、⑦リンパ系（リンパの形成、内環境の概念、リンパ系の構成と働き、リンパ循環、扁桃腺炎の予防）、⑧体育鍛錬の心臓への影響
			呼吸器官	①呼吸の概念、②呼吸器官の構成と機能（気管と肺の構造と機能、鼻腔・咽頭・喉頭の構造・機能・衛生、気管と気管支の構造と機能、痰の形成、肺の構造と機能）、③呼吸運動と気体交換（呼吸運動、呼吸頻度、肺活量、気体交換の原理、肺内の気体交換、組織内の気体交換、一酸化炭素中毒の予防、人工呼吸の原理・方法・意義）、④体育鍛錬の呼吸器官への作用
			消化器官	①食品成分とその作用（食物の栄養成分-タンパク質・糖類・脂肪・水・無機塩類・ビタミン、各栄養成分の人体への働き、偏食を治す）、②消化器官の構成と機能（消化の概念、消化器官の構成：消化管と消化腺、口腔：歯の構成、歯・舌・唾液の食物への消化作用、胃の位置・形態・構造・機能、胃の蠕動と胃液の食物への消化作用、小腸の位置・形態・機能、小腸絨毛の構造、腸液・胆汁・胆汁と腸の蠕動の食物への消化作用、小腸の吸収、大腸の位置・形態・機能、虫垂の位置と虫垂炎、便秘の予防、肝臓の位置、肝臓の機能、ウイルス性肝炎の予防）③消化器官の衛生保健（食べた直後に激しい運動をしない、食中毒の予防）
			新陳代謝	①新陳代謝の概念、生命と代謝の関係、②物質代謝（脂肪・糖類・タンパク質・水・無機塩類の代謝）、③エネルギー代謝（エネルギー代謝の概念、基礎代謝、体温：正常な体温と変動の幅、体温の調節、熱中症の予防と応急手当）
			排泄器官	①排泄の概念、排泄の経路、②泌尿器官（泌尿器官の構成、腎臓の位置・形態・構造、尿の生成：糸球体の濾過作用と腎尿管の吸収作用、尿の形成、腎炎の病理変化、尿の排出：膀胱の機能、排尿反射、泌尿器官の保健）、③皮膚（皮膚の構造：表皮・真皮・皮下組織の構造、皮膚の付属物：汗腺・皮脂腺・毛髪、皮膚の機能：保護・排泄・分泌・体温調整・感覚、皮膚の衛生保健：皮膚の清潔、腫物・霜焼けの予防）
			内分泌器官	①内分泌腺の概念、人体における主要な内分泌腺、②ホルモンの概念、③甲状腺の位置・形態・機能、甲状腺機能亢進症の症状、甲状腺機能低下症の症状、地方性甲状腺腫の発生と予防、④ランゲルハンス島の位置・機能、インシュリンの作用、我が国におけるウシインスリン合成成功の重大な意義、⑤脳下垂体の位置・形態・機能、⑥ホルモンの人体機能への調節
			神経系と感覚器官	①神経系（神経系の働き、神経系の構成、脊髄と脊髄神経の構造と分布、反射と反射神経、脊髄の機能、脳と脳神経：脳の構成、脳神経の分布、脳幹の主な役割、小脳の構造と機能、小脳病変の主な症状、大脳の灰白質と白質、大脳皮質の主な役割、中枢病変の主な症状、脳の高級機能：非条件反射と条件反射、条件反射の形成と生理的意義第一・第二信号系、人の思想と意識活動、天才論への批判、睡眠と夢の成因、神経系の衛生保健：体育鍛錬と体力労働の必要性、十分な睡眠、仕事と休息のバランス、喫煙・飲酒しない）、②感覚器官（感受器と感覚器官の概念と働き、目：眼球の構造、視覚の形成、近視と遠視、目の保健：近視眼とトラコーマの予防、耳：耳の構造、聴覚の形成、耳の衛生：中耳炎と外耳道真珠腫の予防、他の感受器の名称・部位・働き）
			生殖器官	①男性生殖器官の構造と機能（内・外性器の概要、精子の形態と構造）、②女性生殖器官の構造と機能（内・外性器の概要、卵細胞の形態・構造、胎児の発育と栄養）
			思春期生理衛生	①思春期の概念、②思春期の発育の特徴（身体の変化、内臓器官の機能の健全、生殖器官の発育成熟）、③思春期の衛生（月経と月経期衛生、夢精と衛生、思春期疾患の予防）
愛国衛生運動	①ハエ・カ・ネズミ・スズメの害、②ありふれた伝染病の予防（伝染病の特徴と流行の3つの段階、伝染病の予防手段、予防接種、気道伝染病の病因・症状・予防、消化器伝染病の病因・症状・予防、虫媒伝染病の病因・症状・予防、接触伝染病の病因・症状・予防）			
② 1986～1989 「全日制中学生生理衛生教 学大綱」（1986） ⁴⁵⁾	生理 衛生	3年	※学習内容は1978年公布の「教学大綱」とほぼ同様であるため省略する	

③教育目標と学習内容

1986年公布の「教学大綱」の中において、「生理衛生」の教育目標は、「①人体の構造を体系的に理解し、各器官の働きと衛生・保健の基本知識を把握させる。②顕微鏡の使い方、生物図表の作り方、簡単な解剖方法などの生理実験の基本技能を把握させる。③教育の過程中、生徒の独学能力、観察能力、生理現象の分析・解釈能力を重点として育成する。④生理衛生の基礎知識を学習することを通じて、生徒に弁証法的唯物論と愛国主義思想に関する教育が行われる。」⁵⁶⁾に改訂された。学習内容について、一部の単元の構成が調整された以外、具体的な学習内容はほぼ変わらなかった⁵⁶⁾⁵⁷⁾。

2.2.3 高校

(1) 1978～1985年（表7の①参照）

①教科

この時期、学校健康教育は時期Iと同様に、「生物」の中で扱われた。

②配当学年と授業時数

1978年から、「生物」の配当学年は2年であり、授業は週2回、総授業時数は30時間であった⁴⁷⁾。その中において、健康に関する内容の授業時数は10時間を占めた⁵⁸⁾。

③教育目標と学習内容

1978年公布の「教学大綱」によれば、「生物」の教育目標は、「生徒に生物の起源と生物界の変遷に関

表7 時期IIの高校における健康に関する内容の変遷

年	教科	配当学年	単元	内容
① 1978～1985 「全日制十年制学校 中学生物教学大綱 (試行草案)」 (1978) ⁵⁸⁾	生物	2年	生体物質	①生体を構成する化学元素、②生体を構成する化合物：無機物-水と無機塩、有機物-炭水化物・脂肪・核酸・酵素タンパク質
			生物の基本的な構造：細胞	①細胞の構成と働き、②細胞の分裂
			新陳代謝	①新陳代謝の概念と重要な意義、②生物のエネルギー源、③物質代謝とエネルギー代謝・光合成と呼吸作用
			生殖と発育	①生殖：無性生殖と有性生殖、精子と卵子の成熟過程、減数分裂、受精、染色体の数の周期変化、②発育：動物の胎児の発育
			調節とコントロール	①動物のホルモンと神経系の働き
② 1986～1989 「全日制中学生物教学大綱」(1986) ⁵⁹⁾	生物	2年	序論	①生物の特徴、②生物学の発展方向、③生物学を学習することの重要な意義
			細胞	①細胞の発見、細胞説、原形質の概念、②細胞の化学成分：水・無機塩・糖類・脂類・タンパク質・核酸、各物質の働き、細胞を構成する化学元素、③細胞の構造と働き：細胞膜・細胞質・細胞核、細胞の各部分の働き、④細胞分裂
			生物の新陳代謝	①新陳代謝の概念、②動物の新陳代謝：体内細胞の物質交換、③物質代謝：食物の消化、栄養物質の吸収、物質代謝の過程：糖類代謝・脂類代謝・タンパク質代謝、④エネルギー代謝：気体交換、エネルギーの放出、転移、利用
			生物の生殖と発育	①生物の生殖、生殖の概念、②生殖の種類：有性生殖の特徴と概念③減数分裂の概念と意義、精子形成の過程、卵細胞形成の過程、受精の概念と意義、④生物の発育、発育の概念、⑤胚の発育過程、各種組織・器官の形成、胚の発育と環境の関係
			生命活動の調節(動物生物活動の調節)	①高等動物のホルモン調節：甲状腺ホルモン・性ホルモン・成長ホルモンの分泌部位と作用、②神経調節：神経系の調節効果
			遺伝と変異	近親婚と遺伝疾患 など
			生命の起源と生物の進化	①生物の起源、②生物の進化
			生物と環境	自然環境の保護 など

する基礎知識を把握させ、その知識の農業・医薬・工業・国防への応用を理解させる」⁵⁸⁾ ことであった。学習内容の特徴は、主に生命の本質に関する基本知識及び実践上の意義を解き明かすことであり、具体的には、「生物の基本的な特徴」、「生命の起源」、「現代生物科学研究の成果と展望」という3つの領域が扱われた⁵⁸⁾。その中で、健康の内容を扱うのは「生物の基本的な特徴(生体物質、新陳代謝などの学習内容を含む)」領域である⁵⁸⁾。

(2) 1986～1989年(表7の②参照)

①教科

この時期、健康に関する内容は、引き続き「生物」の中で扱われた。

②配当学年と授業時数

1986年以降、「生物」の配当学年は変わらなかったが、総授業時数は56時間に増加した⁵⁵⁾。健康に関する内容の授業時数も約19時間に増加した⁵⁹⁾。

③教育目標と学習内容

1986年公布の「教学大綱」では、4つの新しい教育目標が定められた。その中に、健康に関する内容の教育目標は、「生徒に動物の形態と構造、生理、遺

伝と変異、生物の進化と生態学などの方面の基礎知識を体系的に把握させ、その知識の農業・医薬・工業・国防への応用を理解させる」⁵⁹⁾ ことであった。学習内容について、「教学大綱」では、高校の「生物」の学習は、中学校における「生物」と「生理衛生」を学習した上で、生物の基本的な特徴、生命活動など内容を中心に行われると明確に定められたので、学習内容の構成は、「①細胞に関する知識、②生物個体に関する知識(生物の新陳代謝、生物の生殖と発育、生命活動の調節、遺伝と変異を含む)、③生物界に関する知識(生命の起源と生物の進化、生物と環境を含む)」⁵⁹⁾ という3領域に改訂され、健康に関する内容は領域ごとに定められた。

2.2.4 まとめ

時期IIでは、各学校種において健康に関する内容を扱う教科は時期Iより安定していたが、それらの授業時数及び内容構成は試行錯誤が続いた。この点について、元(2019)は、「80年代では、学校健康教育の独立の教科が開設された。しかし、法的整備がまだされてなかったため、学校健康教育の体系の探索が続いた」¹⁶⁾ と述べている。

各学校種の教科構成からみると、時期Ⅱでは、中学校で独立の教科が新設されたことから、時期Ⅰと同じく、学校健康教育は中学校において特に重視されていたと考えられる。また、当時の教育部は「生理衛生」の実施を確実に実施させるため、いくつかの教育方針の中において、「生理衛生」の実施の重要性と必要性を強調した^{43) 60)}。

一方では、小学校の「自然」と高校「生物」で扱う健康に関する内容の教育目標と授業時数は時期Ⅰとほぼ同様であるが、小学校では、健康に関する内容を扱う「思想品德」が新設され、「自然」で扱う内容と互いに補完された。また、高校では、初めて環境保護に関する内容が加えられ、学習内容が充実された⁵⁹⁾。

張ら(2011)によれば、文化大革命終了後の学校健康教育について、総合的にみると、政策は文化大革命以前より発展したが、教育の主旨は文化大革命以前と同様に、衛生習慣の形成と疾病予防であったので、この時期は学校健康教育の回復・再建期と解釈されている¹⁵⁾。

2.3 時期Ⅲ：1990～2000年

1990年に発出された「学校衛生工作条例」(以下、「条例」と略称する)は中国初の学校健康教育に関する法規であり、現在まで唯一の法規でもある。1990年以前の学校健康教育は、「決定」、「規定」などの方針に従って実施されたが、この「条例」の公布以降は、学校健康教育の実施の法的根拠となった。教育課程について、「条例」の第十三条では、各学校では健康教育を教学計画の中に入れることが定められ、小学校、中学校、高校は健康教育の授業を開設すること、大学、専門学校などの学校は健康教育の選択授業及び講座を開設することが定められている⁶¹⁾。

その後、国家教育委員会^{注12)}は「条例」の第十三条に従って、学校健康教育に関する独立の教科の設置及び授業時数・学習内容を示した「中小學生健康教育基本要求(試行)」(1992)を策定した⁶²⁾。この方針の中において、小学校と中学校で、学校健康教育の独立の教科である「健康教育」を新設することが定められた。「健康教育」以外に、小学校では「自然」、「思想品德」、中学校と高校では「生物」の中においても健康に関する内容が扱われた。

2.3.1 小学校

(1) 1990～1991年(表8の①参照)

この時期、小学校における「教学計画」と「自然」、

「思想品德」に関する「教学大綱」はまだ改訂されなかったので、2つの教科の配当学年、授業時数、教育目標、学習内容は時期Ⅱの1986～1989年の間と同様であった。

(2) 1992～2000年(表8の②参照)

①教科

健康に関する内容は、まず、「自然」、「思想品德」の中で扱われた。1992年以降は、独立の教科として「健康教育」が新設された。また、「体育」の中でも扱われた。

②配当学年と授業時数

「自然」の配当学年は1～6年であり、授業は1～4年週1回、5～6年週2回、授業時数は6年間で合計272時間であった⁶³⁾。しかし、健康に関する内容の授業時数は明確に定められなかった⁶⁴⁾。

「思想品德」の配当学年は1～6年であり、授業は週1回、授業時数は6年間で合計204時間であったが⁶³⁾、「自然」と同様に、健康に関する内容の授業時数は明確に定められなかった⁶⁵⁾。

「健康教育」の配当学年は1～6年で、授業は週1回(1時間)であったが、6年間の総授業時数は明確に定められなかった⁶²⁾。1994年以降、教員の労働負担と生徒の学習負担を軽減するため、「健康教育」の授業時数は毎週0.5時間に削減された⁶⁶⁾。

「体育」の配当学年は1～6年であり、授業は1～2年週2回、3～6年週3回、授業時数は6年間で合計440時間であった⁶⁷⁾。そのうち、健康に関する内容の授業時数は38時間であった⁶⁷⁾。

③教育目標と学習内容

「自然」における健康に関する内容の教育目標は、「生徒に分かりやすい生理・衛生に関する知識を習得させて、心身の健康を増進させる」⁶⁴⁾ことであった。健康に関する学習内容は、低学年(1～2年)、中学年(3～4年)、高学年(5～6年)ごとに設けられ、人体の仕組みと働きに関する内容を重点とした⁶⁴⁾。

「思想品德」における健康に関する内容の教育目標は、「生徒に個人の衛生習慣、環境保護に対する意識、交通安全意識を身に付けさせる」ことであり、学習内容は「個人の衛生習慣の形成」や「交通安全教育」などが扱われた⁶⁵⁾。

「健康教育」の教育目標は、「児童生徒の衛生に関する知識を増やさせ、健康の価値と意義を理解させ、疾病予防に対する意識を育成させる。また、生活の仕方を定着、心身の健康を増進させる」⁶²⁾ことであ

表8 時期Ⅲの小学校における健康に関する内容の変遷

年	教科	配当学年	単元	内容
① 1990～1991	自然	※この2年間、まだ時期Ⅱに公布された「教学計画」及び各教科の「教学大綱」を使用したので省略する		
	思想品德			
② 1992～2000 「九年義務教育全日 制小学自然教学大綱 (試用)」(1992) ⁶⁴ 、 「九年義務教育全日 制小学思想品德 教学大綱(試用)」 (1992) ⁶⁵ 、「中小 学生健康教育基本要 求(試行) 小学生健 康教育大綱」 (1992) ⁶² 、「九年 義務教育全日制小学 体育教学大綱(試 用)」(1992) ⁶⁷	自然	1～2年	人体	①人体は頭、頸、胴体、四肢に分ける、②耳・目・鼻・舌・手の感覚とその作用、③近視の予防、④歯の保護
		3～4年	人体	①人体の主な骨と関節、②骨、関節、筋肉の働き、③運動の骨・関節・筋肉の成長発達への影響
		5～6年	人体	①消化器官(口腔、胃、小腸、大腸、肝臓)、②飲食の衛生、③食品の主な成分、④栄養衛生、⑤呼吸器官(鼻、気道、気管支、肺)、⑥呼吸衛生、⑦血液循環器官(心臓、血管)、⑧心臓の保護、⑨脳と神経、⑩脳の衛生、⑪少年期と思春期初期の身長・体重の変化と保健
	思想品德	1～6年	文明・礼儀 規律遵守	個人の衛生習慣の形成、環境衛生の維持、身近な植物の愛護 交通安全教育、身近なルールの遵守 など
	健康教育	1～6年	人体の解剖と主要な生理的特徴	①頭・頸・胸・腹・四肢など部位の仕組みと働き、目・耳・口・鼻の機能 ②心臓・肺・胃・腸・脳的位置と生理機能とその保健知識、③身長・体重・脈拍の測定方法と測定の意義、④思春期の発育発達の特徴
			個人の衛生習慣と健康	①個人衛生、②口腔衛生、③目の保護、④正しい身体姿勢(座り方・歩き方・立ち方)
			合理的な栄養と健康	①タンパク質・脂肪・炭水化物・無機塩と微量元素・ビタミン・繊維質・水を認識する、②食物から栄養成分を摂取する、③栄養バランス、④食中毒の予防、⑤生の野菜や果物を食べる前に洗う、⑥飲水と生命(飲み水と衛生)
			環境衛生と健康	①健康の3要素(日光・空気・水)、②環境衛生を整えることの重要性、環境汚染の害、③環境保護、益虫・益鳥・草と花の愛護、④学習環境づくり、教室・居室の採光・照明・通風、⑤公衆衛生の維持、⑥蚊・蠅・ゴキブリ・トコジラミ・ネズミの退治
			体育運動と健康	①体育運動と身体健康の増進、②屋外で運動することのメリット、③勉強と休憩のバランス
			ありふれた疾病の予防	①気道感染症、消化管感染症の感染経路と予防、②ワクチンの注射、③小学生のありふれた疾患、④寄生虫病の予防、⑤肝炎・下痢の予防、⑥インフルエンザの予防 ⑦地域疾病の予防(住血吸虫病、地方性甲状腺腫、克山病など)
			安全と傷害の予防	①交通安全、②遊びと鍛錬中の安全、③労働災害、④感電・火傷・ガス中毒・気管異物の予防、⑤止血方法
	精神衛生	①身体健康と心の健康、②心の健康の維持、③団結、互いに助け合う、他人を尊重する、障害のある方を正しく理解して応対する		
	体育	1年	衛生・保健の基礎常識	正しい姿勢(座り、立ち、走り)
		2年	衛生・保健の基礎常識	視力の保護と目の体操、定時・定量・バランスの良い食事
		3年	衛生・保健の基礎常識	運動前後の飲食、水泳・長距離走の安全と衛生
		4年	衛生・保健の基礎常識	簡単な応急手当と熱中症・凍傷に関する常識
5年		衛生・保健の基礎常識	心臓の働きと健康に関する常識	
6年		衛生・保健の基礎常識	神経系の働きと健康に関する常識、思春期の栄養・運動・休憩、タバコの害	

った。学習内容について、児童生徒の発達段階を考慮し、「人体の解剖と主要な生理的特徴」や「個人の衛生習慣と健康」などの8つの単元が設けられた⁶²⁾。

「体育」における健康に関する内容の教育目標は、「体育の授業を通じて、生徒に衛生・保健に関する知識を習得させ、生徒の健康を増進させる」⁶⁷⁾ ことであった。学習内容は「正しい姿勢」、「視力の保護と目の体操」などが扱われ、生徒の発達段階を考慮して学年ごとに配置された⁶⁷⁾。

2.3.2 中学校

(1) 1990～1991年(表9の①参照)

①教科

時期Ⅱの1986～1989年の間と同様に、この時期

の健康に関する内容は、「生理衛生」を通じて実施された。

②配当学年と授業時数

「生理衛生」の配当学年は3年であり、授業は週2回、総授業時数は64時間であった⁶⁸⁾。

③教育目標と学習内容

教育目標と学習内容は時期Ⅱの「生理衛生」とほぼ同様であった⁶⁸⁾。

(2) 1992～2000年(表9の②参照)

①教科

1992年以降、「生理衛生」に代わって「健康教育」が新設された。また、同じ時期の小学校と同じく、「体育」の中でも扱われた。

表9 時期Ⅲの中学校における健康に関する内容の変遷

年	教科	配当学年	単元	内容		
① 1990～1991 「全日制中学生理衛生教学大綱（修訂本）」（1990） ⁶⁸⁾	生理衛生	3年	人体概述	※時期Ⅱにおける「生理衛生」の学習内容とほぼ同様であるため省略する		
			皮膚			
			運動器官			
			循環器官			
			呼吸器官			
			消化器官			
			新陳代謝			
			泌尿器官			
			内分泌器官			
			神経系			
			生殖と発育			
			伝染病			
② 1992～2000 「中小生健康教育基本要求（試行） 中学生健康教育大綱」（1992） ⁶²⁾ 、「九年義務教育全日制初級中学体育教学大綱（試用）」（1992） ⁶⁹⁾	健康教育	1～3年	人体の解剖の生理的特徴	①運動器官、②循環器官、③呼吸器官、④消化器官、⑤神経系、⑥泌尿器官、⑦内分泌器官、⑧免疫系、⑨生殖器官、⑩発育発達とは、⑪発育発達に影響を及ぼす要因		
			思春期の生理衛生	①思春期とは、②思春期男子（女子）の発達の特徴（身長・体重・筋肉などの変化と違い）、③思春期男子（女子）の性的成熟の特徴（生殖機能の発育、第二次性徴、月経、夢精）		
			個人の衛生習慣と健康	①思春期の衛生習慣、②睡眠衛生、生活と規律、③良好な生活様式の形成		
			合理的な栄養と健康	①栄養素の人体での作用、②食品の栄養成分、③栄養不足と健康、④栄養過多と健康、⑤合理的な食事の構成、⑥試験・運動・労働中の栄養バランス		
			学校生活衛生	①学習中に大脳皮質活動の特徴、②学ぶ意欲の育成、学習習慣の形成、学習効率の向上 など		
			ありふれた疾病の予防	①健康の定義、②近視眼・脊柱側弯症・神経衰弱の予防、③思春期高血圧・肺結核・ニキビ・月経異常の予防、④心血管疾患・糖尿病などの予防、⑤性病（淋病・梅毒・尖形コンジローム・エイズ）		
			精神衛生	①思春期の精神的特徴、②思春期におけるありふれた精神障害、③性道徳教育		
			身体運動と健康	①鍛錬中に運動器官の働き、②鍛錬中に心血管系の働き、③鍛錬中に呼吸器官の働き、④鍛錬と安全		
			体育	1年	衛生・保健の基礎知識	①中学校の生徒の生理・心理的特徴と身体運動の関係、②現代健康観の樹立
				2年	衛生・保健の基礎知識	①気持ちと健康、②栄養標準と食事の選び方
3年	衛生・保健の基礎知識	①生活習慣の健康への影響、②環境浄化と身体の健康				

②配当学年と授業時数

「健康教育」の配当学年は1～3年であった⁶²⁾。授業は小学校と同じく週1回（1時間）であり、1994年以降は0.5時間になった⁶⁶⁾。

「体育」の配当学年は1～3年であり、授業は週3回、授業時数3年間で合計210時間であった⁶⁹⁾。その中において、健康に関する内容の授業時数は36時間を占めた⁶⁹⁾。

③教育目標と学習内容

「健康教育」の教育目標については2.3.1の記述

の通りであった。学習内容も8つの単元で構成されるが、学年ごとの内容が定められなかった⁶²⁾。

「体育」における健康に関する内容の教育目標は、「『体育』の授業を通じて、体育・衛生・保健教育を行い、生徒の身体能力を向上させ、心身の発達を助長させる」⁶⁹⁾ ことであった。学習内容は生徒の発達段階を配慮し、学年ごとに定められた⁶⁹⁾。

2.3.3 高校

(1) 1990～1995年（表10の①参照）

①教科

表 10 時期Ⅲの高校における健康に関する内容の変遷

年	教科	配当学年	単元	内容
① 1990～1995 「全日制中学生物学教学大綱（修訂本）」 (1990) ⁷⁰⁾	生物	2～3年	人体概述	※中学校の「生理衛生」の学習内容とほぼ同様であるため省略する
			皮膚	
			運動器官	
			循環器官	
			呼吸器官	
			消化器官	
			新陳代謝	
			泌尿器官	
			内分泌器官	
			神経系	
			生殖と発育	
伝染病				
② 1996～2000 「全日制普通高級中学生物教学大綱（供実用）」 (1996) ⁷²⁾	生物	2～3年	生体物質	①生命体を構成する化学元素、②生命体を構成する化合物
			生命の基本単位：細胞	①細胞分裂、②細胞周期、③細胞の分化と老化、④細胞のがん化
			生物の新陳代謝	①新陳代謝と酵素、②人と動物体内の糖類・脂肪・タンパク質の代謝、③呼吸作用、④新陳代謝の基本類型
			生命活動の調節	①体液調節、②神経調節
			生物の生殖と発育	①生物生殖の類型、②受精のメカニズム、③高等動物の個体発育
			人体の生命活動の調節と免疫	①栄養と健康の関係、②水と無機塩のバランス、③血糖の調節、④体温調節、⑤細胞免疫と体液免疫、⑥免疫不全疾患
			微生物と発酵プログラム	①ウイルスの構造と増殖、②細菌の構造と増殖
			生態・環境及び保護	①地球・生物圏と人、②二酸化ケイ素の循環、③生態系の中で森林の役割、④都市生態系の特徴、⑤人と環境 など

健康に関する内容は、時期Ⅰ、時期Ⅱと同様に、「生物」の中で扱われた。

②配当学年と授業時数

この時期、「生物」の配当学年は2～3年であり、授業は週3回、授業時数は2年間で合計174時間であった⁷⁰⁾。その中において、健康に関する内容の授業時数は40時間を占めた⁷⁰⁾。

③教育目標と学習内容

1990年公布の「教学大綱」の説明部分によれば、健康に関する内容を扱う「生理衛生」領域の教育目標と学習内容は中学校の「生理衛生」とほぼ同様であるが、教員は生徒に中学校の「生理衛生」で学んだ知識をさらに理解できるように指導することが求められた⁷⁰⁾。

(2) 1996～2000年（表10の②参照）

①教科

この時期、健康に関する内容は引き続き「生物」の中で扱われた。

②配当学年と授業時数

1996年以降、「生物」の配当学年と週当たりの授業回数は変わらなかったが、総授業時数は183時間に増加した⁷¹⁾。しかし、健康に関する内容は分散しているため、授業時数は明確に定められなかった⁷²⁾。

③教育目標と学習内容

1996年公布の「教学大綱」の中において、「①生

命活動に関する基本的な知識を獲得させ、その知識を日常生活や社会実践などの場面で応用できるように指導する。②生徒に弁証法的唯物論と愛国主義思想の教育が行われ、科学的世界観を身に付けさせ、道徳性を育成させる。③観察、実験、思考、独学などの能力を向上させる。④生徒に良好な衛生習慣を身に付けさせ、身体と心の健康を増進させる」⁷²⁾という4つの教育目標が定められた。教育目標の改訂に従って、学習内容の構成も変更され、健康に関する学習内容は「生体物質」や「生物の新陳代謝」などの単元に配置された⁷²⁾。

2.3.4 まとめ

1990年以降、学校健康教育に関する法規が制定されるに従って、各学校種において健康に関する内容を扱う教科の配当学年、授業時数及び内容構成の変更が少なくなった。また、張(2009)によれば、小、中学校では、学習内容が豊富で多彩である「健康教育」が新設され、小学校1年から配当されたことは、1992年以降の学校健康教育の最大の特徴である⁷³⁾。時期Ⅲでは、時期Ⅰと時期Ⅱと違い、学校健康教育は小、中学校において重視されていたと考えられる。

また、1992年8月まで、広東省、黒竜江省、遼寧省などの11地域の学校では、「健康教育」の授業が全面的に実施された⁷⁴⁾。特に広東省深圳市、遼寧省瀋陽市・大連市の実施率は90%であった⁷⁴⁾。その

他、山東省、吉林省、内モンゴル自治区、貴州省などの8地域では、「健康教育」の授業の実施率が50%程度の市があった⁷⁴⁾。

2.4 時期IV：2001年以降

この時期、中国では、応試教育を改善するため、素質教育^{注13}という概念が提出され、教育改革が始まった⁷⁵⁾。教育改革の推進に従って、国務院では、学校教育は健康第一という教育理念を立て、学校健康教育の中身を強化する必要があるという方針が明確された⁷⁵⁾。その方針に準じて学校健康教育が改革された。

その後、国務院は2008年北京オリンピックを契機に、全国の青少年の身体能力を高めるため、2007年に公布された公文書の中において、学校では、疾病予防、衛生・安全、麻薬・タバコなどの青少年の健康教育に関する内容を積極的に展開し、必要な授業時数を確保することと述べている⁷⁶⁾。翌年、教育

部はこの公文書の内容に従って、学校健康教育を強化するため、教育方針である「中小学健康教育基本要求（試行）」（1992）に替わる「中小学健康教育指導綱要」（2008）を策定した⁴⁾。この「綱要」の中において、各学校は「体育と健康」の授業時間数の中に、1学期（半年）6～7時間を割り当て、「健康教育」の授業を行うことが定められた⁴⁾。なお、学校健康教育を扱う教科は「体育と健康」だけでなく、小学校段階では「品德と生活」、「品德と社会」など、中学校段階と高校段階では「生物」などの教科の学習内容としても行うことと述べている⁴⁾。

学校健康教育に関する法規である「学校衛生工作条例」（1990）と教育方針である「中小学健康教育指導綱要」（2008）は長い間改訂が行われなかったため、教育部は2018年8月公布の公文書の中において、それらを改訂することを提起した^{77)注14}。

表11 時期IVの小学校における健康に関する内容の変遷

年	教科	配当学年	単元	内容
① 2001～2010 「全日制義務教育体育（1～6年級）体育と健康（7～12年級）課程標準（実験稿）」（2001） ⁷⁹⁾ 、「全日制義務教育科学（3～6年級）課程標準（実験稿）」（2001） ⁸⁰⁾ 、「全日制義務教育品德と生活課程標準（実験稿）」（2002） ⁸¹⁾ 、「全日制義務教育品德と社会課程標準（実験稿）」（2002） ⁸²⁾ 、 ¹	体育	1～6年	身体の健康	①正しい身体姿勢の形成、②身体能力の向上、③身体の健康（思春期知識、生活習慣病、HIVと性病の予防）、④栄養、環境と不良行為の害（栄養と健康、喫煙・飲酒・麻薬の害、正しいライフスタイルの形成）
			心の健康	体育と心の健康の関係（心の健康と身体の健康）
			社会適応	日常生活から健康知識の獲得
	科学	3～6年	生理と健康	①栄養バランス、②飲食安全、③呼吸器疾患、④心臓と血管の働きと保健、⑤感覚器の働き、⑥脳に関する知識
			発育発達	①人間の成長過程、②青少年の身体の特徴、③思春期の心身の発達の特徴
			良好な生活習慣	①薬・環境・不良な生活習慣の害、②良好な生活習慣の重要性
	品德と生活	1～2年	良好な生活習慣	①飲食、②個人衛生、③公衆・環境衛生、④健康常識
			自己防衛意識と能力	①保健衛生施設の機能、②交通安全、③応急手当
	品德と社会	3～6年	自分の成長	①ストレスと挫折の対応、②喫煙・飲酒・麻薬の害、③応急手当
			自分と家庭	①個人の心身の健康と良好な生活習慣の形成
② 2011～ 「義務教育体育と健康課程標準」（2011） ⁸³⁾ 、「義務教育小学科学課程標準」（2011） ⁸⁵⁾ 、「義務教育品德と生活課程標準」（2011） ⁸⁶⁾ 、「義務教育品德と社会課程標準」（2011） ⁸⁷⁾	体育と健康	1～6年	身体の健康	①保健に関する基本知識、②良好な体型と身体姿勢の形成、③身体能力の向上、④自然環境に対する適応能力
			心の健康と社会適応	①強固な意志の形成、②感情の調節能力の向上、③協力意識と能力の形成、④体育道徳観の形成
	科学	1～6年	物質科学領域	電気の安全な使い方 など
			生命科学領域	①生命が存在できる条件（空気、水、栄養物質等）、②生物の発育・発達・生殖、③生物と自然環境 など
	品德と生活 (2016年以降は道徳と法治になった)	1～2年	健康、安全な生活	①良好な生活・衛生習慣の形成、②自己防衛意識と能力の形成、③学校生活に適應すること
			愉快、積極な生活	人間関係に関する知識
			責任を果たし、愛する心がある生活	①交通安全、②環境保護
	品德と社会 (2016年以降は道徳と法治になった)	3～6年	自分の成長	①ストレスと挫折の対応、②喫煙・飲酒・麻薬の害、③応急手当、④ネット・ゲーム依存症
			自分と家庭	①個人の心身の健康、②良好な生活習慣の形成
			学校生活	人間関係
コミュニティ生活			交通安全	

¹ 2001年公布の小学校の「課程設置方案」（「教学計画」から改称したものである）によれば、小学校における「品德と生活」と「品德と社会」は2001年から設立した。しかし、それらの「課程標準」は2002年に公布したものである。

2.4.1 小学校

(1) 2001～2010年(表11の①参照)

①教科

この時期、学校健康教育の独立の教科が廃止された。健康に関する内容は、「体育」、「科学」(2001年以降、「自然」は「科学」に改称された)、「品德と生活」(「思想品德」から改称した教科であり、1～2年で実施する)、「品德と社会」(「思想品德」から改称した教科であり、3～6年で実施する)の中で扱われた⁷⁸⁾。

②配当学年と授業時数

以下、各教科の配当学年と授業時数を述べるが、全ての教科で、健康に関する内容の授業時数は明確に定められなかった^{79)・82)}。

「体育」の配当学年は1～6年であり、授業は1～2年週4回、3～6年週3回、授業時数は年間総授業時数の10～11%を占める⁷⁸⁾。

「科学」の配当学年は小学校3～6年であった⁷⁸⁾。授業は週1回以上であり、授業時数は年間総授業時数の7～9%を占める⁷⁸⁾。

「品德と生活」の配当学年は小学校1～2年であった⁷⁸⁾。授業は週2回であり、授業時数は年間総授業時数の7～9%を占める⁷⁸⁾。

「品德と社会」の配当学年は小学校3～6年であった⁷⁸⁾。授業は週2回であり、授業時数は年間総授業時数の7～9%を占める⁷⁸⁾。

③教育目標と学習内容

「体育」における健康に関する内容の教育目標は、「生徒に健康に関する基本的な知識を把握させ、その知識の応用力を育成させ、個人の健康に対する責任感と健康的なライフスタイルを身に付けさせる」⁷⁹⁾ことであった。健康に関する学習内容としては、「身体の健康」、「心の健康」、「社会適応」など幅広い内容が扱われる⁷⁹⁾。

「科学」における健康に関する内容の教育目標は、「生徒に分かりやすい科学知識を習得させ、正しい行為・習慣とライフスタイルを身に付けさせる」⁸⁰⁾ことであった。健康に関する学習内容は「生理と健康」、「発育発達」、「良好な生活習慣」という3つの単元で構成され、時期Ⅲの「自然」で扱う医学領域に偏重する学習内容から、日常生活に役に立つ内容になった⁸⁰⁾。

「品德と生活」における健康に関する内容の教育目標は時期Ⅲの「思想品德」と同様に、「生徒に環境

保護に対する意識、良好なライフスタイルを身に付けさせる」ことであったが、健康に関する学習内容は時期Ⅲより充実になり、「飲食」、「個人衛生」、「健康常識」、「交通安全」、「応急手当」など内容が扱われる⁸¹⁾。

「品德と社会」における健康に関する内容の教育目標は、「生徒の環境保護に対する意識を身に付けさせ、自分の感情と行為をコントロールでき、基礎的な応急手当を身に付けさせ、良好な生活習慣とライフスタイルを身に付けさせる」⁸²⁾ことであった。学習内容は「ストレスと挫折の対応」、「喫煙・飲酒・麻薬の害」、「応急手当」、「心身の健康と良好な生活習慣の形成」などが扱われる⁸²⁾。

(2) 2011年～(表11の②参照)

①教科

2011年以降、「体育」は「体育と健康」に改称された⁸³⁾。また、2016年以降、「品德と生活」と「品德と社会」の内容を統合して、「道徳と法治」になった⁸⁴⁾。

②配当学年と授業時数

「体育と健康」の配当学年は1～6年であり、授業は1～2年週4回、3～6年週3回、授業時数は年間総授業時数の10～11%を占める⁸³⁾。

「科学」の配当学年は低学年になり、小学校1年からになった⁸⁵⁾。授業時数は年間総授業時数の7～9%を占める⁷⁸⁾。

「品德と生活」と「品德と社会」の配当学年と授業時数は変わらなかった⁷⁸⁾。2016年以降に設置された「道徳と法治」の配当学年は1～6年であり、授業時数は年間総授業時数の7～9%を占める⁷⁸⁾。

③教育目標と学習内容

2011年公布の「体育と健康」に関する「課程標準」の教育目標は2001年公布の「課程標準」とほぼ変わらなかったが、学習内容は変更された⁸³⁾。具体的には「心の健康」、「社会適応」を統合し、「心の健康と社会適応」という単元になり、心の健康に関する内容が増加された⁸³⁾。

2011年公布の「科学」に関する「課程標準」では、健康に関する内容の教育目標は、「生物体の主要な特徴を了解し、生物体の生命活動とライフサイクルを理解し、人体と健康・生物体と環境の相互作用を理解する」に改訂された⁸⁵⁾。健康に関する内容も「電気の安全な使い方」や「生命が存在できる条件」などに変更された⁸⁵⁾。

2011年公布の「品德と生活」に関する「課程標準」が定められた教育目標はほぼ変わらなかったが⁸⁶⁾、「人間関係」、「環境保護」などの学習内容が加えられた⁸⁶⁾。

「品德と社会」は「品德と生活」と同じく、教育目標が変更されなかったが、学習内容が改訂されて拡充された⁸⁷⁾。具体的には、「ネット・ゲーム依存症」、「人間関係」などの内容が加えられた⁸⁷⁾。

2016年以降に設置された「道徳と法治」の教育目標や学習内容は「品德と生活」・「品德と社会」と同様である⁸⁴⁾。

2.4.2 中学校

(1) 2001～2010年 (表12の①参照)

①教科

中学校では、小学校と同様に、学校健康教育の独立の教科が廃止された。2001年以降、「体育」は「体育と健康」に改称した⁷⁹⁾。また、この時期、「生物」の中にも健康に関する学習内容が扱われた。その他、

中学校では、学校健康教育の内容を含む「思想品德」が新設された⁷⁸⁾。

②配当学年と授業時数

小学校の各教科と同じく、中学校の各教科で扱う健康に関する内容の授業時数は明確に定められなかった⁷⁹⁾⁸⁸⁾⁻⁹¹⁾。

「体育と健康」の配当学年は9年義務教育の7～9年(中学校1～3年にあたる)であった⁷⁸⁾。授業は週3回、授業時数は年間総授業時数の10～11%を占める⁷⁸⁾。

「生物」の配当学年は7～8年であった⁷⁸⁾。授業は週3回、授業時数は年間総授業時数の7～9%を占める⁷⁸⁾。

「思想品德」の配当学年は7～9年であった⁷⁸⁾。授業は週2回、授業時数は年間総授業時数の7～9%を占める⁷⁸⁾。

③教育目標と学習内容

「体育と健康」の教育目標について、中学校の「体

表12 時期Ⅳの中学校における健康に関する内容の変遷

年	教科	配当学年	単元	内容	
① 2001～2010 「全日制義務教育体育(1～6年級)体育と健康(7～12年級)課程標準(実験稿)」(2001) ⁷⁹⁾ 、「全日制義務教育生物課程標準(実験稿)」(2001) ⁸⁸⁾ 、「全日制義務教育思想品德課程標準(実験稿)」(2002) ^{89)、1}	体育と健康	7～9年	身体の健康	①運動の身体健康への影響、②健康に良い食品の選び方 ③生活様式の健康への影響	
			心の健康	①身体健康に対する心の健康の意義、②感情をコントロールする方法	
			社会適応	日常生活から健康知識の獲得	
	生物	7～8年	生物圏の中での人間	①栄養知識、②飲食安全、③環境保護	
			生物の生殖、発育と遺伝	人間の生殖と発育	
			健康な生活	①思春期の発育の特徴、②伝染病、③生活習慣病 ④喫煙・飲酒・麻薬の害、⑤薬品常識	
	思想品德	7～9年	成長中の自分	①思春期の精神衛生に関する常識、②心の健康	
			自己と他者の関係	思春期の心の健康	
	② 2011～ 「義務教育体育と健康課程標準」(2011) ⁸³⁾ 、「義務教育生物学課程標準」(2011) ⁹⁰⁾ 、「義務教育思想品德課程標準」(2011) ⁹¹⁾	体育と健康	7～9年	身体健康	①保健に関する基本知識、②よい体型と身体姿勢の形成、 ③身体能力の向上、④自然環境への適応能力
				心の健康と社会適応	①強固な意志の形成、②感情の調節能力の向上、③協力意識と能力の形成、④道徳観の形成
生物		7～8年	生物と環境	生物圏の中での人間と他の生物との共存	
			生物圏の中での人間	①食べ物と自然環境、②生命活動を支えるエネルギーの供給、 ③人体の代謝廃棄物の排出、④神経系と内分泌系による調節、⑤人間と生物圏	
			生物の生殖、発育と遺伝	人間の生殖と発育	
思想品德		7～9年	健康的な生活	①思春期の健康、②伝染病と免疫、③健康を脅かす疾病、 ④喫煙・飲酒・麻薬の害、⑤医薬の常識	
			自己認識	①身体の変化と心身の発達、②思春期の精神衛生に関する常識、 ③学習ストレス、④感情のコントロール など	
			自尊・自立	基本的な応急手当	

¹ 2001年公布の中学校の「課程設置方案」によれば、中学校における「思想品德」は2001年から設立した。しかし、その「課程標準」は2002年に公布したものである。

育と健康」と小学校の「体育」は同じ「課程標準」を使用したので、教育目標は同様であった⁷⁹⁾。健康に関する学習内容としては、「運動の身体健康への影響」、「健康に良い食品の選び方」、「生活様式の健康への影響」、「身体健康に対する心の健康の意義」、「感情をコントロールする方法」などがあつた⁷⁹⁾。

「生物」における健康に関する内容の教育目標は、「生徒に人体の構造・機能及び衛生・保健に関する知識を身に付け、生理と精神の健康を増進し、生徒の環境保護に対する意識と良好な生活・衛生習慣を身に付けさせる」⁸⁸⁾ことであつた。健康に関する学習内容としては、「栄養知識」、「飲食安全」、「環境保護」、「人間の生殖と発育」、「思春期の発育の特徴」、「伝染病」、「生活習慣病」、「喫煙・飲酒・麻薬の害」、「薬品常識」があつた⁸⁸⁾。

「思想品德」における健康に関する内容の教育目標は、「生徒に環境を保護する能力を育成し、自分の感情をコントロールする方法を身に付け、青少年の心身発達の特徴を了解し、心身の健康を増進する」⁸⁹⁾ことであつた。健康に関する学習内容は主に「思春期の精神衛生に関する常識」や「心の健康」などであつた⁸⁹⁾。

(2) 2011年～(表12の②参照)

①教科

この時期、健康に関する内容は引き続き「体育と健康」、「生物」、「思想品德」の中で扱われた。

②配当学年と授業時数

「体育と健康」、「生物」、「思想品德」の配当学年と授業時数は2001～2010年の間と同様であつた。

③教育目標と学習内容

「体育と健康」は引き続き小学校と同じ「課程標準」を使用したので、「心の健康」、「社会適応」を統合し、「心の健康と社会適応」という単元になり、心の健康に関する内容が増加された以外、他の変化がなかつた⁸³⁾。

「生物」の教育目標は2001～2010年の間と変わらなかつたが、学習内容の中において、環境保護に関する内容の量が増加された⁹⁰⁾。

「思想品德」は「生物」と同じく、教育目標は変わらなかつた。しかし、2011年公布の「課程標準」の中において、心の健康に関する内容の量が増加され、応急手当に関する内容が加えられた⁹¹⁾。

2.4.3 高校

(1) 2001～2002年(表13の①参照)

①教科

この時期、高校の学校健康教育では、「体育と健康」と「生物」の中で取り扱われる。

②配当学年と授業時数

「体育と健康」の配当学年は1～3年であり、授業時数は3年間で合計192時間であつた⁹²⁾。その中において、健康に関する内容の授業時数は定められなかつた⁷⁹⁾。

「生物」の配当学年は2～3年であり、授業は週3回、授業時数は2年間で合計183時間であつた。その中において、健康に関する内容の授業時数は約55時間であつた⁹³⁾。

③教育目標と学習内容

この時期の「体育と健康」では、小学校から高校まで、共通の「課程標準」を使用したので、教育目標は同様であつた⁷⁹⁾。健康に関する学習内容としては、「身体の健康」、「心の健康」、「社会適応」という3つの単元から構成され、「正しい身体姿勢の形成」や「身体能力の発展」などの内容が扱われた⁷⁹⁾。

「生物」は2000年公布の「教学大綱」に基づいて実施した⁹³⁾。教育目標と学習内容は1996年公布の「教学大綱」とほぼ同様であつた⁹³⁾。

(2) 2003～2016年(表13の②参照)

①教科

健康に関する内容が扱われる教科は2001～2002年と同様であつた。

②配当学年と授業時数

2003年以降、高校教育改革の推進に従って、高校段階では、単位制が導入された⁹⁴⁾。「体育と健康」は11単位であり、その中において、健康に関する内容は1単位(18時間)を占める⁹⁵⁾。

「生物」は6単位であるが、健康に関する内容は分散しているので、単位数は明確に定められなかつた⁹⁶⁾。

③教育目標と学習内容

2003年、教育部は高校段階の生徒の年齢と発育段階を配慮し、高校の「体育と健康」教科の独立の「課程標準」を策定した⁹⁵⁾。しかし、この「課程標準」が定められた教育目標は2001年公布の「課程標準」とほぼ同様であり、健康領域の学習内容は心の健康に関する内容を充実した以外、顕著な変化はなかつた⁹⁵⁾。

「生物」における健康に関する内容の教育目標は、「生徒に生物に関する知識は生活や環境保護への応

表 13 時期Ⅳの高校における健康に関する内容の変遷

年	教科	配当学年	単元	内容
① 2001～2002 「全日制義務教育体育 (1～6年級) 体育 と健康 (7～12年 級) 課程標準 (実験 稿)」 (2001) ⁷⁹⁾ 、 「全日制普通高級中 学生物教学大綱 (試 験修訂版)」 (2000) ⁹³⁾	体育と健康	1～3年	身体の健康	①正しい身体姿勢の形成、②身体能力の発展、③身体の健康 (思春期に関する知識、生活習慣病、HIVと性病の予防)、④栄養、環境と不良行為の害 (栄養と健康、喫煙・飲酒・麻薬の害、正しいライフスタイルの形成)
			心の健康	体育と心の健康の関係 (心の健康と身体の健康)
			社会適応	日常生活から健康知識の獲得
	生物	2～3年	生体物質	①生命体を構成する化学元素、②生命体を構成する化合物
			生命の基本単位：細胞	①細胞分裂、②細胞周期、③細胞の分化と老化、④細胞のがん化
			生物の新陳代謝	①人と動物体内の糖類の代謝、②人と動物体内の脂肪・タンパク質の代謝、③生体恒常性、④呼吸作用、⑤新陳代謝の基本類型
			生命活動の調節	①体液調節、②神経調節
			生物の生殖と発育	①生物生殖の類型、②受精作用、③高等動物の個体発育
			生態環境の保護	①環境汚染の影響、②環境汚染の対策
			人体の生命活動の調節と免疫	①栄養と健康の関係、②水と無機塩のバランス、③血糖の調節、④体温調節、⑤細胞免疫と体液免疫、⑥免疫不全疾患、⑦現代免疫学
微生物と発酵プログラム	①ウイルスの構造と増殖、②細菌の構造と増殖 など			
② 2003～2016 「普通高中体育と健康 課程標準 (実験 稿)」 (2003) ⁹⁵⁾ 、「普 通高中生物課程標準 (実験稿)」 (2003) ⁹⁶⁾	体育と健康	1～3年	身体の健康	①身体能力の発展、疾病予防の意識と能力の向上 (伝染病、HIV、性病)、②栄養・環境・生活様式の健康への影響、③身体の健康状況の改善
			心の健康	①自己価値観の形成、②感情の調節能力の向上、③強固な意志の形成、④心の健康を維持する能力
			社会適応	体育と健康に関する問題の関心
	生物	1年前期	細胞の構造	細胞説の成立過程の分析
			細胞の分化、老衰と死亡	①細胞の老衰及び死亡と人類の健康の関係に関する検討、②がん細胞の主要な特徴、悪性腫瘍の予防に関する検討
		1年後期	遺伝細胞の基礎	①細胞の減数分裂及び細胞分裂における染色体の変化、②配偶子形成の過程、③受精の過程
			遺伝の基本的な規律	伴性遺伝
		2年前期	生体恒常性	①恒常性、②内分泌系と神経系による恒常性調節、③体温調節、身体の水と塩の調節、血糖調節、④免疫系における恒常性の維持
	2年後期～3年	生物科学と健康	①遺伝子診断と遺伝子治療、②臓器移植、③避妊の原理と方法、④人工受精、人工受精児などの生殖技術、⑤抗生物質の合理的な使用	
	③ 2017～ 「普通高中体育と健康 課程標準」 (2017) ⁹⁷⁾ 、「普通 高中生物学課程標準 」 (2017) ⁹⁸⁾	体育と健康	1～3年	健康教育
健康生活				①伝染病の予防、②けがの予防と応急手当、③心の健康、④学校衛生、⑤口腔衛生、⑥健康な生活様式
生物		2年後期～3年	応急処置	①応急薬品の使用、②救急電話のかけ方、③心肺蘇生、④外傷の処置 など
			感染症の予防とコントロール	①感染源と感染、②感染経路、③感染症の予防とコントロール

用などを理解させ、積極的な生活態度と健康的なライフスタイルを身に付けさせる」⁹⁶⁾ ことであった。2003年、「生物」の学習内容は日常生活に接近し、生徒の学習を多様化するため、教育部は従来の「教学大綱」の内容を整理して吸収した上で新しい「課程標準」を策定した⁹⁶⁾。健康に関する学習内容としては、「悪性腫瘍の予防に関する検討」、「受精の過程」、「恒常性」、「避妊の原理と方法」などが扱われた⁹⁶⁾。

(3) 2017年～ (表13の③参照)

①教科

学校健康教育は引き続き「体育と健康」と「生物」を通じて実施される。

②配当学年と授業時数

この時期、「体育と健康」は12単位に増加したが、健康に関する内容は必修部分で引き続き1単位を占める。

「生物」における健康に関する内容は選択履修部分で3単位を占める。

③教育目標と学習内容

2013年から、教育部は2000年以降の教育改革の経験をまとめ、諸外国の実例を参考にした上で、「体育と健康」に関する「課程標準」の改訂を始め、2017年に新しい「課程標準」が公布された⁹⁷⁾。この「課程標準」では、「学習を通じて、基本的な健康に関する

る技能と健康管理の能力を身に付けさせる。感情のコントロール・人間関係・環境適応に関する能力を向上させる。健康意識、生命を大切にす意識、生活に熱愛する意識を育成させる。心身健康を改善させ、生存能力と生活能力を向上させる」⁹⁷⁾という教育目標が定められた。学習内容としては、2003公布の「課程標準」の学習内容を「健康教育」という単元に統合し、「安全と運動」と「避難や運動によるけがの予防」などの内容が加えられた⁹⁷⁾。

「生物」は「体育と健康」と同様に、2013年から「課程標準」の改訂を始め、2017年に新しい「課程標準」を公布した⁹⁸⁾。その中において、「高校段階の『生物』の学びは義務教育段階の『生物』の学びを発展・深化することである」という方針を明確し、学習内容が改訂された⁹⁸⁾。健康に関する内容は選択履修部分で、「健康生活」、「応急処置」、「感染症の予防とコントロール」という3つの単元で構成され、日常生活に応用できる学習内容が設けられた⁹⁸⁾。

2.4.4 まとめ

時期IVの学校健康教育について、張ら(2011)は、2001年以後の学校健康教育は「中小学健康教育指導綱要」(2008)などの方針に基づき、科学化・多様化を図りつつ発展していると指摘した⁹⁹⁾。また、「素質教育」では、生徒の身体の健康と心の健康を増進することが求められているので、心の健康に関する教育は、時期IIIよりもっと重視されるようになった。2001年以降、科目が多すぎることを改善するため、教育部は基礎教育科目を調整し、「健康教育」を廃棄した。その後の学校健康教育は「体育と健康」と関連教科の中で行われるようになった。そのため、張ら(2011)とは2001年以後の学校健康教育は多元的発展期になったと考察した⁹⁹⁾。また、この点について、元(2019)は、「課程改革の影響を受け、学校健康教育は独立の教科の制約から解放して、他教科の学習内容との結合を重視するようになった。健康に関する内容を他教科の内容と結合することによって、学校健康教育の実施形態はより多様になるであろう。しかし、他教科と融合することで、健康教育の地位が保たれない状況にも陥った」¹⁰⁾と述べている。

III. 終わりに

本稿では、中国建国以降の学校健康教育に関する

法規、方針及び基準に基づき、学校健康教育に関する教育課程の歴史的変遷について概観した。

時期Iにおける学校健康教育の内容は日常生活との繋がりが弱く、難易度が高かったが、授業時数の占める割合が高かった。時期IIにおける学校健康教育の授業時数については大幅な増減がみられなかったが、内容の難易度は時期Iよりも下げられた。また、小学校では新教科、高校では環境保護に関する内容が加えられた。時期IIIに入ると、健康に関する内容を扱う教科が増加され、小学校と中学校ではさらに独立の教科が新設された。また、この時期の学校健康教育には心の健康に関する内容が加えられた。時期IVでは、独立の教科が廃止されたが、各教科で扱う健康に関する内容は、日常生活に役に立つ内容に改訂され、教科間の繋がりと、各学校種間の繋がりが重視された。例えば、飲酒・喫煙・麻薬の害に関する内容は、小学校の「道徳と法治」、中学校の「生物」、高校の「体育と健康」で繰り返し扱われた。

表14は、健康に関する内容を扱う教科の配当学年と授業時数の時期別変遷を示したものである。4つの時期のうち、時期IIIでは、学校健康教育の独立の教科が開設され、授業時数が定められた(週0.5時間)。また、関連教科の中にも数多くの健康に関する内容が扱われ、小学校の「自然」と「思想品德」以外、他の教科では、健康に関する内容の授業時数が明確に定められた。そのため、時期IIIは学校健康教育の発展の最良の時期と考えられる。

現在に至る時期IVでは、教育方針である「中小学健康教育指導綱要」(2008)と現行の各教科の「課程標準」に基づき、学校健康教育に関する学習内容はより科学的になってきた。しかし、独立の教科が廃止になり、高校の「体育と健康」以外、各教科の「課程標準」では、健康に関する内容の授業時数が示されていない(表14)。王(2013)によれば、多くの学校は健康教育を重要視していないし、学校健康教育に関する方針によって定められた学習内容と授業時数が実現されていない。また、改善策としては、学校健康教育は他教科の内容と結合することより、児童青少年の発達の段階を配慮し、専門の教材と教員を配置する独立の教科が必要であると指摘している¹⁰⁰⁾。このように、時期IVの学校健康教育は時期IIIより、学習内容が充実したものの、実施状況は芳しくないと言える。

最後に、本稿では、中国建国以降の学校健康教育

についての教育課程の構成の動向と特徴を明らかにした。これにより、本稿の内容は今後中国の学校における健康教育が検討される際の基礎資料になりう

るであろう。今後、本研究の成果を踏まえ、日本における中国の学校健康教育に関する教育課程が比較・分析されることを期待したい。

表 14 各時期における健康に関する内容を扱う教科の配当学年と授業時数の変遷

学校種	年	時期Ⅰ		年	時期Ⅱ		年	時期Ⅲ		年	時期Ⅳ		
小学校	1950～1955	自然	4・2制:5～6年 5年制:4～5年 ()	1978～1985	自然常識	5年前期 (13時間)	1990～1991	自然	5年制:2～5年 6年制:3～6年 ()	2001～	体育	1～6年 ()	
	1956～1962		1～6年 (29時間)		思想品德	1～5年 ()		思想品德	5年制:1～5年 6年制:1～6年 ()		科学 (2011年以降の配当学年は1年からになった)	3～6年 (2011年以降1～6年) ()	
	1963～1966		5～6年 (13時間)	自然	5年制:2～5年 6年制:3～6年 ()	自然	1～6年 ()	品德与生活 (2016年以降は道徳と 法治になった)	1～2年 ()				
			思想品德	5年制:1～5年 6年制:1～6年 ()	思想品德	1～6年 ()	品德と社会 (2016年以降は道徳と 法治になった)	3～6年 ()					
							1992～2000	健康教育	1～6年 (週0.5時間) ¹				
								体育	1～6年 (合計38時間)				
中学校	1950～1951	自然	2年 (20時間)	1978～1985		2～3年の前期 (48時間)	1990～1991	生理衛生	3年 (64時間)	2001～	体育と健康	1～3年 ()	
	1952～1957	衛生常識	1年 (36時間)		生理衛生	3年 (64時間)		健康教育	1～3年 (週0.5時間) ¹		生物	1～2年 ()	
	1958～1962						1992～2000	体育	1～3年 (36時間)		思想品德	1～3年 ()	
	1963～1966	生物	2年後期 (51時間)										
高校	1952～1962	生物	1年 (72時間)	1978～1985	生物	2年 (10時間)	1990～1995	生物	2～3年 (40時間)	2001～2002	体育と健康	1～3年 ()	
	1963～1966		2年 (22時間)			1986～1989			2年 (19時間)		1996～2000	2～3年 ()	生物
											2003～	体育と健康	(18時間)
												生物	()

1 () 内は健康に関する内容の授業時数である。また、未入力の場合は健康に関する内容の授業時数が明確に定められないという意味である。

2 教育方針である「中小生健康教育基本要求(試行)」(1992)では、「健康教育」の週当たりの授業時数だけ定められた。

注

- 1) 本稿で引用した中国語の文献の翻訳は、はじめに第一著者が行い、その後翻訳会社に依頼してバックトランスレーションを行った上で、最後に齟齬が生じた箇所を第一著者が修正した。
- 2) 本稿で引用した中国教育部(日本の文部科学省に相当する政府機関)が策定・発出した公文書等は全国一律で適用される。なお、中国の学校健康教育は大学まで行うが、本稿は、大学の部分を除き、義務教育と高校の学校健康教育について紹介する。
- 3) 総合実践活動とは、「情報技術教育」、「研究性学習」、「コミュニティーサービスと社会実践」、「労働・技術教育」という4つの構成部分を参加することを通じて、生徒の情報の収集・整理する能力、知識の応用能力、問題の解決能力、コミュニケーション能力を発展させることを目指す教育実践活動である。
- 4) 地方課程とは、地方の政治・経済・文化の状況に合わせて編成する教育課程である。
- 5) 1966年、文化大革命が開始された以降、学校教育が大きく崩壊したので、学校健康教育に関する教科の開設・発展も停滞した。なお、文化大革命時期については資料を収集中であり、整い次第、発表する予定である。
- 6) 「自然」とは、広く自然、道具、機械などについての知識、経験を教える教科である。
- 7) 中国の行政機関で、日本における内閣に相当する。
- 8) 中国教育部が策定した学校制度、教育課程の編成と授業時数を規定したものである。
- 9) 各教科の目的、内容及びその内容の授業時数などが規定され、教育課程を編成する際の基準で日本における学習指導要領に相当するものである。1952年以降、「課程標準」は「教学大綱」に改称されたが、2001年以降は再び「課程標準」に改称された。なお、中国では、2001年以前、「課程標準」・「教学大綱」の改訂の周期が短いので、「草案」・「試行草案」・「試用」などと表記されたものであっても、いずれも確定版として使用されていた。
- 10) 旧制小学校であり、初等小学校4年と高等小学校2年を含む。
- 11) 5・3・3制の小学校段階である。
- 12) 中国教育部は1985年に国家教育委員会として改組され、1998年に中国教育部として再設置された。
- 13) 「素質教育」とは、生徒の創造精神と実践能力を中心として、学生の全面的発展を図る教育である。
- 14) 現時点(2022年7月)までにまた公布されなかった。

文献

- 1) 顧明遠 主編:教育大辭典, 1620,上海教育出版社,上海,1998.
- 2) 顧明遠 主編:教育大辭典, 4349,上海教育出版社,上海,1998.
- 3) 張一英 李惠德:学校健康教育,9-10,甘肅人民出版社,蘭州,2004.
- 4) 中國教育部:中小學健康教育指導綱要,2008.
- 5) 中國衛生部:中小學健康教育規範,2011.
- 6) 日本保健科教育學會 編:保健科教育法入門,3,大修館書店,東京,2017.
- 7) 閻智力:中國與日本中、小學健康教育的比較研究,體育科學,2005年5期:30-34,2005.
- 8) 王剛:中、日、米三國學生健康教育的對比分析,體育世界(學術版),2008(6):63-65,2008.
- 9) 孔祥武:中日學校體育與健康教育的比較研究,赤峰學院學報,2006(004):48,52,2006.
- 10) 曹榮芳:日本保健體育課程的改革及對我國的啟示,體育科技文獻通報,第14卷11期:70-71,2006.
- 11) 喻堅:中日學校體育與健康教育的比較研究,教學與管理,1996年1期:61-62,1996.
- 12) 國立教育政策研究所:「教科などの構成と開発に関する調査研究」研究成果報告書(17) 保健のカリキュラムの改善に関する研究-諸外國の動向-,81-90,2004.
- 13) 山田美香:中國的心理健康教育,人間文化學研究 25号:101-118,2016.
- 14) 深見英一郎:中華人民共和國の學校體育制度に関する研究,天理大學學報 218:21-31,2008.
- 15) 張蕊 余小鳴:學校健康教育 實踐與理論,4-5,北京大學醫學出版社,北京,2011.
- 16) 元英:改革開放以來我國中小學健康教育的發展歷程、特征與啟示,河北師範大學學報,Vol.21 (No.2):105-112,2019.
- 17) 張一英 李惠德:學校健康教育,16,甘肅人民出版社,蘭州,2004.
- 18) 蔡海軍:我國小學科學課程發展的過程及特點,湖南師範大學教育科學學報, vol.2 (5):70-73,2003.
- 19) 中國國務院:關於改善各級學校學生健康狀況決定,1951.
- 20) 中國國務院:高等教育部、教育部、衛生部、國家體育運動委員會關於開展學校保健工作的指示,1954.
- 21) 中國教育部:小學四、二制暫行教學計畫·小學五年一貫制暫行教學計畫,1952.
- 22) 中國教育部:小學高年級自然課程暫行標準初稿,1950.
- 23) 中國教育部:1957-1958年度小學教學計畫,1957.
- 24) 中國教育部:小學自然教學大綱(草案),1956.
- 25) 中國教育部:全日制小學教學計畫,1963.
- 26) 中國教育部:全日制小學自然教學大綱(草案),1963.
- 27) 中國教育部:中學暫行教學計畫(草案),1950.
- 28) 中國教育部:中學教學計畫表,1951.
- 29) 中國教育部:初中自然課程標準草案,1951.
- 30) 中國教育部:中學生物教學大綱(草案),1952.
- 31) 中國教育部:中學教學計畫(草案),1952.
- 32) 中國教育部:中學教學計畫(修訂草案),1953.
- 33) 中國教育部:1954-1955年中學教學計畫,1954.
- 34) 中國教育部:1956-1957年中學教學計畫,1956.
- 35) 任樹德:初一上衛生常識的教學問題,生物學通報,1954(7):40-43,1954.
- 36) 中國教育部:1958-1959年中學教學計畫,1958.
- 37) 中國教育部:全日制中學教學計畫(草案),1963.
- 38) 中國教育部:全日制中學生物教學大綱(草案),1963.
- 39) 劉復興:蘇聯的衛生教育,4-6,人民教育出版社,北京,1955.
- 40) 陳孝大 主編:教育行政概論,中央廣播電視大學出版社,北京,2001.
- 41) 劉恩山:建國以來我國中學生物課程簡要歷史回顧,生物學通報, vol.42 (10):37-41,2007.
- 42) 周玉良:對1958—1960年“教育革命”的幾點看法,紀念「教育史研究」創刊二十周年論文集(9):186-189,2009.
- 43) 中國教育部:中、小學衛生工作暫行規定(草案),1979.
- 44) 中國教育部:關於改進和加強中學生理衛生知識教育的通知,1984.
- 45) 中國教育部:全日制十年制學校小學自然常識教學大綱(試行草案),1978.
- 46) 才曉航:20世紀中國中小學課程標準·教學大綱匯編(思想政治卷),3,人民教育出版社,北京,2001.
- 47) 中國教育部:全日制十年制中小學教學計畫(試行草案),1978.
- 48) 中國教育部:全日制五年制小學教學計畫(修訂草案),1981.
- 49) 中國教育部:全日制五年制小學思想品德教學大綱(試行草案),1982.
- 50) 中國教育部:全日制小學自然教學大綱,1986.
- 51) 中國教育部:義務教育「五·四」制小學教學計畫(初稿),1986.
- 52) 中國教育部:義務教育「六·三」制小學教學計畫(初稿),1986.
- 53) 中國教育部:全日制小學思想品德教學大綱,1986.
- 54) 中國教育部:全日制十年制學校中學生理衛生教學大綱(試行草案),1978.
- 55) 中國教育部:1986-1989年普通中學教學計畫,1986.
- 56) 中國教育部:全日制中學生理衛生教學大綱,1986.
- 57) 孫伝賢:20世紀中國中小學課程標準·教學大綱匯編(生物卷),3,人民教育出版社,北京,2001.
- 58) 中國教育部:全日制十年制學校中學生物教學大綱(試行草案),1978.
- 59) 中國教育部:全日制中學生物學教學大綱,1986.
- 60) 中國教育部:全日制中學暫行工作條例(試行草案),1978.
- 61) 中國國務院:學校衛生工作條例,1990.
- 62) 中國國家教育委員會ほか:中小學生健康教育基本要求(試行),1992.
- 63) 中國國家教育委員會:九年義務教育全日制小學、初級中學課程方案(試行),1992.
- 64) 中國國家教育委員會:九年義務教育全日制小學自然教學大綱(試用),1992.
- 65) 中國國家教育委員會:九年義務教育全日制小學思想品德教學大綱(試用),1992.
- 66) 中國國家教育委員會:實行新工時制對全日制小學·初級中學課程(教學)計畫進行調整的意見,1994.
- 67) 中國國家教育委員會:九年義務教育全日制小學體育教學大綱(試用),1992.

- 68) 中国国家教育委員会：全日制中学生理衛生教学大綱（修訂本），1990.
- 69) 中国国家教育委員会：九年義務教育全日制初級中学体育教学大綱（試用），1992.
- 70) 中国国家教育委員会：全日制中学生物学教学大綱（修訂本），1990.
- 71) 中国国家教育委員会：全日制普通高級中学課程計画（試験），1996.
- 72) 中国国家教育委員会：全日制普通高級中学生物教学大綱（供実験用），1996.
- 73) 張芯：改革开放30年我国学校衛生与健康教育發展成就,中国学校衛生,30卷第5期：385-393,2009.
- 74) 陸江 李浴峰 主編：中国健康教育史略,192,人民軍医出版社,2009.
- 75) 中国共産党中央ほか：关于深化教育改革全面推進素質教育的決定,1999.
- 76) 中国国务院：中共中央国务院关于加强青少年体育增強青少年体質的意見,2007.
- 77) 教育部ほか：綜合防控儿童青少年近視实施方案,2018.
- 78) 中国教育部：義務教育課程設置方案,2001.
- 79) 中国教育部：全日制義務教育体育（1~6年級）体育与健康（7~12年級）課程標準（実験稿），2001.
- 80) 中国教育部：全日制義務教育科学（3~6年）課程標準（実験稿），2001.
- 81) 中国教育部：全日制義務教育品德与生活課程標準（実験稿），2002.
- 82) 中国教育部：全日制義務教育品德与社会課程標準（実験稿），2002.
- 83) 中国教育部：義務教育体育与健康課程標準,2011.
- 84) 中国教育部：关于2016年中小学教学用書有关事項的通告,2016.
- 85) 中国教育部：義務教育小学科学課程標準,2011.
- 86) 中国教育部：義務教育品德与生活課程標準,2011.
- 87) 中国教育部：義務教育品德与社会課程標準,2011.
- 88) 中国教育部：全日制義務教育生物課程標準（実験稿），2001.
- 89) 中国教育部：全日制義務教育思想品德課程標準（実験稿），2002.
- 90) 中国教育部：義務教育生物課程標準,2011.
- 91) 中国教育部：義務教育思想品德課程標準,2011.
- 92) 中国教育部：全日制普通高級中学課程計画（試験修訂稿），2000.
- 93) 中国教育部：全日制普通高級中学生物教学大綱（試験修訂版），2000.
- 94) 中国教育部：普通高中課程方案（実験），2003.
- 95) 中国教育部：普通高中体育与健康課程標準（実験），2003.
- 96) 中国教育部：普通高中生生物課程標準（実験稿），2003.
- 97) 中国教育部：普通高中体育与健康課程標準,2017.
- 98) 中国教育部：普通高中生生物課程標準,2017.
- 99) 張芯 余小鳴：学校健康教育 实践与理論,8-9,北京大学医学出版社,北京,2011
- 100) 王曇：中国学校健康教育的研究,当代体育科技,20期：156-157,2013.
(2021年7月12日投稿受付, 2023年1月4日受理)